鬼神剣客伝【改訂版】

春好 優

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

はそれに涙を流し己の未熟さを恨んだ。強さと強い心を望んだ紫苑は異国の地へと人知れず旅だった。

異国の地を旅して数年紫苑はある王国の端にある森である少女たちが襲われているところに遭遇するのだが……

これは世界を旅する鬼の終わりなき物語である。

元々小説家になろうで投稿していたものを少し変更して書いています。

もちろん新しい方も小説家になろうで投稿して

目次

プロローグ ―― 1
第1話 ―― 5
第2話 ―― 9
第3話 ―― 19
第4話 ―― 27
第5話 ―― 31
第6話 ―― 35
第7話 ―― 39
第8話 ―― 48
第9話 ―― 53
第10話 ―― 63

プロローグ

東国のとある城

東の土地の極東と呼ばれる島国にある国で城が燃えていた。そしてその中を走る男が一人いた。男は侍と呼ばれる戦士でその中でも特別な血を引いていた。そんな男は今、必死で燃え盛る城の中を何かを探すように突き進んでいた。

そして男が城の最上階に着くとそこでは、袴を着た男が女を1人辱めながら、女を殺そうとしていた。女は裸であり、その肌には多数の怪我が見受けらた。あるところには切り傷があり、あるところには打撲の後が、またある所には刺傷すらあった。それは女がどれだけの拷問をされていたかを想像するのには十分な光景であった。そしてその答えに至った侍の男は怒りの形相で女を殺そうとしている男を睨みながら、最愛の人の名前を叫んだ。

「桜子ー！」

「ぶわはははは！遅かったじゃないか！紫苑よ。見よ！これが俺に逆らったものの末路だ！どうだ悔しいだろ？お前の婚約者だったのだからな。だがもう遅い！こいつはもう壊れている」

紫苑と呼ばれた侍の男の叫びを聞いて下卑た笑みを浮かべる男は紫苑を嘲笑うように言った。

「き、貴様ァ！貴様だけは！貴様だけは！絶対に許さんぞ獅子野信幸ししののぶゆきよ！」

紫苑の怒りは頂点に達しそうになっていた。だが彼は怒りを抑えていた。怒りに呑まれれば、桜子までも巻き込んでしまうからだ。それに桜子が人質のような立場にあっては簡単に動けなかった。そして周りの炎は彼の怒りを体現したかのように燃えていた。

「おいおい、ここまでお膳立てしてそんだけかよ。この腰抜け野郎が！もっと怒れよ！怒ったお前をボコボコにしてやった時どうなるのかなぁ～お前のその面はよぉ！」

紫苑が怒りを抑えていることに気づき、信幸は挑発をする。彼の今の目的は怒りに任せ、刀を抜刀した紫苑に桜子を斬らせるのが目的

だった。だがそれでも動かない紫苑に苛立ち彼はとうとう取っては行けない手段を取ってしまったのだ。
「お前がその気ならこっちにも考えがある！」
そして彼は刀を抜き桜子の首をはねたのだ。そしてその光景に現実を受け入れられなかった紫苑の時間はゆっくりと進み出した。彼の怒りは急速に冷えて言った。しかしそれは怒りが消えたわけでは無い。燃え盛る炎のような激情の怒りではなく、氷のよう冷えた静かなる怒りであった。
「桜子？」
名前を呼んでも桜子が答えることは無かった。そして紫苑は桜子の死体を見ながら泣いていた。
「俺のせいだ。俺のせいで桜子は死んだ…」
その言葉を聞いた信幸は紫苑を馬鹿にしようと口を開こうとしたが、いきなり掛かった圧によりそれは出来なかった。それは紫苑から放たれていた。
この時、信幸は初めて自分が開いては行けない扉を開いたことを知った。
燃え盛る炎はいつの間にかこの場所まで来ていた。だがそれに構って居られるほど信幸は馬鹿でなかった。なぜなら今。一瞬でも気を抜いたら死が自分を襲うことを本能的に察知していた。
紫苑の体から次第に赤いオーラが漂い始めた。そのオーラは紫苑を覆い身体は一回り大きくなり信幸を見つめる瞳は赤く染まっていた。
紫苑の目には理性が伺えず既に暴走している状態であった。刹那紫苑は顔を上にあげると咆哮を上げた。その咆哮は天まで届くかの如く大きなものであった。そしてその膨大なまでの力の波動を解放したのだ。
その日極東のある大名の収める土地では多くの者の犠牲とともに城を中心として焦土とかし人の住める土地ではなくなった。

数年後大陸のとある王国

ある国の川の近くで男が眠りから覚醒した。男の黒い髪に赤いメッシュが入った髪は長く、束ねられポニーテールにされていた。また男の顔は整っており、イケメンと呼ばれる部類だろうか。そして男の服はこの国では珍しい、異国の服を着ていた。

「酷い夢だ」

男はそんなことを言った。そしてその後、彼はゆっくりと立ち上がり、川に向かった。

川で彼は顔を洗っていた。そして冷たい水で目を覚ました彼は荷造りを始めた。

彼は荷造りを終えると刀を腰に差し、三度笠を被り、道中合羽を着て旅の続きを再開するために進み出すのだった。

剣客の名を天鬼紫苑（あまきしおん）と言う。

数時間後

川から離れ、森を歩いていた紫苑はそれから1時間ほど歩くと、道を見つけた。彼は街に向かうため道に沿って歩くことを決め進んだ。

道を歩くと暑くなく、程よい暖かさを感じる太陽の光を浴び、春の訪れを感じながらゆっくりと進んでいく。

その間はただただ平和な時間が流れるだけだった。

「キャー!」

だが、そんな平穏を妨げるように道ではなく、森の方から女性の悲鳴が聞こえた。その瞬間紫苑は音を置き去る勢いで、悲鳴の元へと向かった。

森を少し進むと紫苑の目には金髪の少女と銀髪の少女が複数人の男に囲まれており、その中の1人が手に持った剣で少女たちを殺そうとしているのか振りかぶっていたところだった。それを止めようと

声をかけようとした瞬間金髪の少女からとてつもない力を感じ出そうとした言葉が喉奥に引っ込んでしまった。
「これはどういうことだ？」
その声にその場にいた全員が振り向いた。

第1話

数日前アレフテスト王国王城

よく晴れた日の王城の庭にて2人の少女がお茶を飲んでいた。そこは日除け用のガゼボと呼ばれる建物があり外壁は無く、柱と屋根だけの存在である。そんな建物の中では金髪と銀髪の美しい少女が居る。先程も言った通りにお茶を飲みお菓子を少し食べお話をするそんな平和な世界が続いていた。

金髪の少女の名前はテレスティーナ・アレフテストと言いこの国の第2王女である。そんな彼女は大人しそうな雰囲気で上品さが伺える優しい笑顔を浮かべている。言うなら綺麗と言える顔立ちをしている。

そんなテレスとは対照的にもう1人の銀髪の少女、ルジアーナ・ルベリオスは明るくその元気な笑顔からは活発そうな女の子であると感じられる。

「美味しいお茶だねテレス！」

「そうでしょ？久しぶりに良い茶葉が手に入ったの！」

嬉しそうに手のひらを合わせながら笑顔を浮か楽しそうに話している。話す内容は世間話から恋愛など幅広いことでルーナから話題を振っている。その中でも恋愛事情が多く年頃の女の子であることが伺えてしまう。

2人は普通この時間には学園に通っているのだが今が夏休みということもあってお茶会を開いていた。普通なら友達と言えど中々王城に招待することは難しいのだがルーナはテレスの父の弟つまり叔父の娘と言うことで家族関係で特別待遇になっている。そんな2人だからこそテレスやルーナといった愛称で呼び合うことが出来ている。普通の貴族ならまず愛称で呼ぶなど不敬に当たるために本人が望んでもなかなか呼べるようなものでは無い。

「そう言えば最近は物騒な話が多いよね」

「そうですね。そのような話ばかりで不安になってしまいますね」

ルーナが何気なく話したことは本当に世間話で話したようなのだ

がそれに対してテレスは不安そうな顔をしてお茶を眺めてしまっている。ルーナの言う物騒な話とは今王国では貴族派の人達が隣国の帝国と手を組んで王国に対する反乱を起こそうとしているという噂が学園を含め国内でそのような噂が飛び交うようになっている。

最初はただの噂だと割り切っていてもテレス自身もその話を聞いて不安になってしまい遂には父に話を聞きに行ったのだが子供の心配することではないとあっさりと追い返され取り合ってはくれなかった。

そんなことがありながら学園生活を過ごしながら学園生活を不安な気持ちで送っているといつの間にか夏休みに入っていてそんなおりに気分を晴らしたいと思ったテレスはルーナを誘いお茶会を開いたと言うわけだ。それでも結局は話題に上がってしまったのだが。

「暗い話はなしにて明るい話をしましょう？」

「そうだね！あっ！そういえば最近あの子がね～」

テレスの話題変換は暗い顔になっていた彼女を心配したルーナが突然のことながらも対応したおかげで成功しいい気分転換になったと思われる。そんな中でルーナが話し出した恋バナに食いつくテレスであった。

数時間後

日が暮れ始め空が赤く染まり出したことでテレス達のお茶会はお開きになり夕食をとった後で2人でお風呂に入っていた。

そんな中でテレスは湯船に浸かりながら先程ルーナが話していた恋バナに着いて考えていた。

(それにしてもまさかあの子があの人とそんなことになっていたなんて知りませんでした。あの子そんな素振りも見せなかったのに)

テレス自身恋愛などの話に疎く、ルーナの話す内容はそんな彼女にはとても新鮮なものでそれを聞くことが楽しみになるほどであった。

この城に今居るのはテレスとルーナ、そしてテレスの父に母、兄が

２人だ。姉もいるそうなのだが今は他国へと嫁いて行ったらしい。夢みる乙女であるテレスはそんな姉のことを考えると自身の将来も不安になりながらも楽しみであった。
　テレスの姉の嫁ぎ先は他国の皇太子でそれが当時であるために今は現国王でもあった。そんな人と結婚した姉をテレスは誇らしくも憧れていた。
　彼女達は１６歳で結婚適齢期で素敵な殿方を望むま夢見がちな少女たちである。政略結婚で相手を選ぶのは難しくてもそれを望むのは仕方の無いことだ。
　テレスは大浴場にてそのようなことを考え、思いに浸ってしまっていた。
「あ！テレスまた胸が大きくなってる！」
「きゃっ！いきなり何するんですか！」
　テレスが物思いにふけている間に後ろに回り込んだルーナがテレスの胸を揉んでしまった。いきなりで驚いたテレスは直ぐにルーナから離れると彼女は顔を赤らめ恥ずかしそうに自身の胸を抱きしめた。ルーナはイタズラ好きでたまに隙あらばこのような行為に及ぶりいつも元気で明るい裏では小悪魔な一面を持っている。
「フッフフフ」
「て、テレス落ち着いてただのイタズラだからね？」
　テレスは少しずつ冷静になると今度は恥ずかしさが怒りに変換されていく。その怒りが伝わったのかルーナは少し慌てている。
（ふふそのままもっと慌ててくれたら嬉しいのですのに）
「私は至って落ち着いていますよ。落ち着かなくては行けないのはあなたですよルーナ……」
「ご、ごめんなさーい！」
「フフ、今日という今日は許しませんよ！」
　テレスはルーナのイタズラをそのまま仕返した。具体的なことはもう少しあるのだが乙女の秘密と言うことにしておく。
　そんな２人の騒がしさを聞きつけたテレスの母が浴場に来て２人を叱り出した。その勢いのせいで２人は完全に恐縮している。まさ

に鬼の母の姿である。
怒られた後に2人はテレスの自室に向かい同じ布団に入り寝ることになった。その姿はまさに姉妹のような姿だ
ベッドに入った2人は眠気に襲われて少しずつ瞼を閉じていく。そんな中で心に抱いた不安を押し込めながらこの平和なときを願った少女がいた。

第2話

暗い夜の中でテレスはふと目が覚めた。何か大きな音が聞こえた気がしたためである。外を気にしてみると何か騒がしかった。嫌な予感が横切ったテレスは横で寝ているルーナを揺さぶって起こそうとした。けれどなかなか起きないルーナにテレスは少し大きめの声をかけた。

「ルーナ！起きてくだい！ルーナ！」

「ん～？どうしたのテレス？まだ暗いけどもう起きてるの？まだ眠いよ」

ルーナは朝に弱いためこの状況は仕方の無いことであった。しかしそんな寝ぼけたルーナを見つめるテレスはと言うと目を擦りながら起きようとする彼女を起こしたことを申し訳なく思ってしまっていた。

そんな時テレスの耳に足音が聞こえてきた。王女が眠る場所であるのだから防音はある程度出来ている。しかしそんな壁を超えて聞こえてくる足音は急いでいるように速いテンポである。そのことから慌てたようにテレスはルーナに話し出した。

「ルーナよく聞いてください。何かこの城で起きています。このままではまずいことになりますよ！」

「そんなこと言われても。でも何か起きてるんだね？」

ルーナは混乱しながらもテレスを信用した。その目には先程の眠そうな目はなく真剣な眼差しをしていた。それに嬉しさを感じたテレスは微笑みを浮かべていた。しかしそんな場合では無いため直ぐにシャキッと顔を変えた。城から聞こえてくる音はただ騒がしいだけでなくよく聞いてみれば悲鳴まで聞こえている。そのためにテレスは直ぐに動き出そうとベッドから降りようとした。すると部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「テレスティーナ様！居ますか！居るなら此処を開けてください！」

先程の足音の主はいつの間にかというかテレスが悩んでいる間に部屋に着いてしまったようだ。敵なのかもしれないと思うもその声

は女性のものでテレスは聞き覚えがあった。
頭の中にその人物像が浮かぶとテレスは直ぐにドアの前に走って行く。
「はい！少し待ってください！」
テレスがドアを開けるとそこには侍女と言う訳ではなく騎士がいた。しかも女性のである。騎士になる女性とは珍しいものでこの国では初になる女性騎士、名をクリスティン・アルセフト。騎士団では愛称でクリスと呼ばれている。
彼女は数多くいる男性騎士を圧倒し最年少で入隊した天才と呼ばれていて落ちこぼれと言われているテレスとは正反対の人間である。しかし時たまにお茶会をしている時に彼女の父である国王が将来の護衛として紹介して何度か話していた。
彼女はテレスを見ると安心したように息を吐いた。
「テレスティナ様…良かったご無事で、今城は帝国の奇襲によりほぼ陥落寸前です。国王陛下よりテレスティーナ様とルジアーナ様を秘密の抜け道より脱出させよと命令を受け参りました！」
「お父様達はどうするんですか？」
「陛下達はこの城に残り守る義務があると…」
後ろで話を聞いているルーナは困惑して居ました。
「お父さんは何処にいるの？」
「ルベリオス公爵は……帝国の情報を陛下に伝えた後お亡くなりに…」
「そんな！」
少し言い渋っていクリスはそのまま本当のことを言った。その事実にルーナは涙を流していた。その姿を見て逆に冷静になったテレスはクリスの方を見る。本当なら自身も家族のことが心配のはずで直ぐに向かいたいだろう。しかしそれでは無力な自分に何ができるのか、そんな思いと共に手を強く握っている。
「テレスティーナ様、ルジアーナ様、迷っている暇はございません。私が先導しますので後に着いてきてください！」
「はっはい！」

クリスは2人の様子を見て己の失敗を感じていた。しかし後の祭りであるために自身が授かった命令を遂行するために2人の迷いある感情を吹き飛ばすように強く言葉を発した。そのおかげか泣いているルーナもどうにか返事もできて嗚咽をしながらもクリスの方を向いていた。2人は互いに勇気を分け合うように手を握り覚悟を決めたように進んで行くクリスについて行く。
(覚悟を持たないと、父を母を見捨てる覚悟でなく託してもらった命を守る覚悟を)
心の中で家族の心配をしながらも自分たちを逃がしてくれようとクリスに託してくれたものを思いながらテレスは覚悟を決めた。

数時間後後
クリスの案内により王城の地下に存在していた隠し通路をクリスが開けてそれに2人は驚きながらその奥へと進んでいった。薄暗く真っ暗な闇の中でクリスの持つ松明がテレス達を照らしている。
そんな暗い道を進む中でテレスは何度も後ろを振り向きそうになっていた。抜け道に行くまでに運良く3人は侵入者に相対することは無かったがそれでも襲われている人はいるわけで多くの悲鳴がその耳の中へと吸い込まれていた。女の人の悲鳴や男の人の悲鳴、それはテレスやルーナは聞き覚えのある声もあった。しかしそれ自体が誰なのかを判別することを彼女達の心が拒んでいた。
テレスは大好きであった父の、母の、兄達の安否を確認したい気持ちでいっぱいになっている。それでも決してテレス達が後ろを振り向くことは無かった。それは振り向いては行けないという使命でもあった。何故なら前を歩くクリスもまた悲鳴が聞こえる度に震え、何も持っていない手は強く握りしめ、もう片方は松明自体が悲鳴をあげるくらいに力が入っていた。それが逆にテレス達の心を冷静にさせてもいた。だからこそ2人は我慢をして前に進んでいた。
「テレスティーナ様もうすぐ出口です」

クリスはテレスにそうはっきりと言った。それはルーナよりも不安を抱いているテレスに気を使ってのことである。
「テレスもうすぐだって、頑張ろう！」
ルーナからも励まされるとテレスは少し元気を貰ったのか少しだけ歩くことが軽く感じていた。そうしていると先の方に光が見え始めた。それは紛れもない出口であり数時間暗闇を歩いていた３人にとっては希望になり心が喜んでいるのがそれぞれ感じている。
少しずつ光が強くなるにつれて光は大きくなりやっと外に出ることができた。外に出ると太陽がだいぶ上に上がっていてどれだけ時間がたったかを理解することができる。それに対してテレスとルーナの２人は驚きを顔に出している。
入口から出た先には木がいっぱいあってここが森であることに気づくのはそう時間がかかることは無かった。
「やっと出られたぁー」
ルーナが嬉しそうに気をぬけた声で言った。その声につられてテレスも気が抜けたように座り込んだ。だが騎士である彼女は気を抜かず警戒を怠らず辺りを見渡している。
「追っても魔物もいないみたいですし、少し休みましょう」
本当なら敵が追って来るので休むということはまだやってはいけなかっただろう。だがそれでも２人は限界である。クリスもそれを理解しているために休息をしている。
「ごめんなさい私達のせいで…」
「いえ、王女様達を守るのが私の任務なのでお気になさらず」
「それでもだよ！テレスも私も１人ならあのまま城に残ってたと思うし…本当ならこんなとこで止まってたら」
「確かにそうですがテレスティーナ様とルジアーナ様の限界が来てからでは遅いので今の間にしっかりと休んでください」
クリスはそう言って気にしてないようで２人に笑みを向けた。そしてクリスはコンパスを確認して進む方向を確認していた。

数日後

城から抜けて数日間、テレス達はずっと森を進んでいた。抜け道から広がっていた森はアルゴス大森林と呼ばれるもので巨人が作ったとか巨人が何かを守っているとかそういう言い伝えがある森である。しかし普通にも巨人種と呼ばれる魔物は居るので本当かどうかは分からない。

そんなこの森は多くの魔物がいて昆虫種のまだ小さな大百足や人喰い蜘蛛、または人型種のゴブリンやオークという魔物と遭遇していた。それらは全てクリスが全て倒し、時にはその魔法が炸裂する姿もあった。

(約に立ちたい。けど私ではクリスティン様を邪魔してしまう。…悔しい)

ただ守られるだけなのが何処までも悔しいが自分の弱さを理解している分何もできなかった。時にはクリスが大丈夫かと聞いてくるのだがその想いがある分テレス達は大丈夫だと言うのである。

最初の夜はクリスが持ってきていた非常食を食べていたがそれも次第になくなり、彼女が狩ってきた動物を食べたり、食べられる野草を食べたりしていた。しかしクリスはまだしもテレスは初めての経験のために戸惑うことが多かった。そ一例を上げるならクリスが解体していた動物を見て吐いてしまっていた。だがそれも最初の数回で今は大丈夫である。それでも以外にルーナはそれを見ても何事もないようにしていた。

テレス達が目指すのは隣国であるライオネス王国である。そのために一直線に森を抜けると思っていたのだがどうやら中央を避けて

迂回するようだ。それもそのはずアルゴス大森林は中央に行くほど危険な魔物がいるからである。しかも中央に行けば行くほど迷いやすく生きて帰ったものはいないという。
　そうして進んでいるとが街道に出た。アルゴス大森林は危険だがその分資源も多く、低層域には街や道があったりする。しかしそこで街道を見て険しい表情をするクリスがいた。
「どうかしましたか？」
「…ここは危険なので早く離れましょう」
　クリスは静かにそして冷静な声で言った。最初はよくわからなかったテレスだが街道は目立ちやすくテレス達を探している可能性の高い帝国兵に見つかりやすいと直ぐに気づいた。ルーナも気づいたのか直ぐに行こうと走ろうとしていた。
　３人は直ぐに街道を渡った。目的地に行くにはどちらにしろここを通って森を回らないといけない。だから戻るのではなく進んだのである。
「ぶもおおおおお！」
　テレス達が街道を通って向かい側の森に入った瞬間にその音はなった。最初は唖然として何が起こっているのかをテレスとルーナは理解出来なかった。しかしクリスの完全警戒している姿にその事態を理解した。
　この低い音からしておそらく角笛、しかもこのタイミングと来ては最悪なことであるのは明白だった。すると音の後に次第に男達の声が混じって来ている。
　すると数人の男達が３人の前に現れた。その男達は３人の女子を見ると下卑た顔をしてテレス達を見ていた。今まで向けられたことのない種類の悪意ある目線にテレスはたじろいでしまう。しかし他の２人はそれに負けず睨んでいる。
「おぉ！まさかこんなとこまで逃げているとは、陛下のお考えは正しかった」
　男達はそう言うと剣を引き抜いてテレス達に向けた。完全にこちらを舐めているのか余裕の表情をしている。

「しかしまぁ！もっと優秀そうなやつがついてると思ったら女騎士とはこれは楽勝だなぁ」
「陛下が言うには王女以外はどうなっても良いらしいぞ。魔なしの厄姫なんかどうしたいのか俺らには分からんがな」
　それを聞いて選別するようにテレス達を見ている男たちに身震いを起こしてしまっている。テレスは元々王国で出来損ないと呼ばれていた。そんなテレスを皇帝が欲していると言うとどういうことか分からないがいいことでは無いはずだ。その想いがテレスを不安にさせているとテレスの手に柔らかい感触が感じられた。何かと思いテレスは手を見るとルーナがテレスの手を握っていた。
　それはテレスを安心させてのことなのかルーナ自身を安心させてのことなのかはたまた両方か分からないがテレスはそのおかげで安心が出来た。
　テレスは無言のまま視線を変えずにそのまま握り返した。
「女騎士は上玉だな。王女はどっちだ？」
「確か金髪の方だ。ということはあの銀髪とヤレるのか中々に良いなぁ」
　その舐め回すような視線にテレスとルーナは身震いを起こした。クリスの方を見ても絶対零度の眼差しで男達を見ていた。
「貴様ら！黙って聞いていたら好き勝手に言って、貴様らなんぞにこの身にもこのお方達にも指1本触れさせんぞ！」
「フューかっこいいねぇ。だがそんな強がりがいつまで続くかな？」
「フンなら強がりかどうか試してみるか？」
　相手の挑発に挑発で返したクリスは王国の制式装備である剣を抜いた。しかしその剣は普通の鋼であるため、この数日で手入れをする暇がなく刃こぼれが激しかった。当たり前である。硬い外殻を持つ昆虫種を倒していたのだから当たり前だ。特別な鉱石でない限り耐久値は直ぐに無くなる。
　そんな武器だからこそ相手からしたらあまり危機感を感じないようで表情すら変わらない。
　一触即発の空気が漂う中で彼女はバレないように指を後ろにして

魔力で字を空中に写した。空中に書かれた文字は簡単なものだった。
（私が合図をしたら逃げて下さい）
　テレスはその文字に固まってしまった。理解したくないと言ってもいいだろう。文句を一言も言わず2人を守っていたのはクリスひとりだ。そんな相手を見捨てるようなことを提案されては善良なものなら迷いが生まれるのも仕方がなかった。
（お礼も恩返しも何も出来ていないのに見捨てるなど…）
　そんなテレスの気持ちを察してのことなのかクリスは後ろを向いて相手に聞かれないぐらいの声で言った。
（信じてください）
「テレス、クリスさんを信じよ?」
　ルーナは信じてると言わんばかりにハッキリと言った。そんなルーナに驚きながらもテレスは覚悟を決めて何も言わずに頷いた。
「へっ何を言ったのかは知らんがそろそろ仲間がくるんでね。あいつらが来る前にお前らをひっ捕らえて色々とさせてもらおうかな?」
　クリスを舐めきった1人の男がクリスに近づき剣を振り下ろした。しかしそれは粗雑なもので適当に振り下ろしたのがよくわかる。クリスはそんな剣を滑らせるように剣を流してそのまま男を斬った。
「王国流剣術・輪閃」
　その一瞬の流れに唖然とする男達は石のように固まっていた。
「走って!」
　その合図と同時にテレスとルーナの2人は後ろを向いて走り出した。草の中を走る、木を避けながら後ろから聞こえてくる剣戦の生々しい音を聞きながら。クリスを信じてただ走っていた。
「こっちにいたぞ!」
　走っていたのもつかの間、何故か逃げた先で待ち伏せをされていて逃げ場を失った2人は足を止めた。周りを見渡して逃げる場所を探すもどこにも無く近づいてくる男たちの足に合わせてゆっくりと後ろに後退する。しかし直ぐに背後には木が背中に着いた。そんな中でテレスは先回りをされていたことに疑問を感じた。
「何故って顔をしてるな?何故俺たちが待ち伏せしてたのかを。それ

はなぁお前たちの前にいたあいつらは帝国兵の中でも馬鹿な連中でな、あいつらはただの囮だったんだよ。王国の天才騎士と呼ばれたクリスティンとか言う女騎士の気を引きつけるためのなぁ」
　それを聞いてテレスは納得した。何故ならあの間にも増援が来る気配がなかったからだ。
（悔しいあんな奴らに捕まるなんて…）
　テレスは諦めるように膝を着いた。
「テレスには触れさせないよ！」
　そう言ってルーナはテレスを守るように魔法を展開させた。
「これ以上近づいたらこの魔法をお前らにら撃つ！」
「ダメです！貴方だけでも逃げて！」
「ふはははは、そんなちゃちなもんが向けられても怖かねぇよ。ガキが！大人舐めてっと痛い目見るぞ？」
　男は笑いながらルーナを蹴り飛ばした。蹴り飛ばされたルーナは木にぶつかり蹴られたお腹を抱えて咳き込んでいる。
「ルーナ！」
「ははは、選ばしてあげようかこのまま抵抗して痛い目見るか、それとも抵抗して痛い目見てお友達が殺される姿を見るか？あぁ一応言っておくが陛下は少しぐらいなら痛めつけてもいいと仰られてるからな」
　男は笑いながらテレスに手を伸ばした。何も出来ず助けもないそんな状況にテレスは絶望し、涙が頬を流れた。
（何も出来ない私がルーナを守るためにはこの男の手を取るしか、ごめんなさいクリスティン様私にはどうすることも…）
　テレスは親友を助けるために男の手を取ろうとした。しかしそれを防ごうと小さな手がテレスの手を掴んだ。
「ダメだよテレス、こんなやつの手をとっちゃダメだ！」
　ルーナはそう言ってテレスの行動を止めた。傷ついているはずのルーナに言われて悲しくなってくる。
（なんでどうして傷ついている貴方がそんなことを言えるのですか？どうして…）

「あぁ、あと少しで殺されずに済むはずだったのに。そんなに邪魔がしたいなら死ねや！」
男は鬱陶しそうに言いながらルーナに向けて殺す気で剣を振りかぶった。それに対して拒否を示したテレスは叫んだ。
「キャー！」
その叫びが男に届くと共に強烈な風が帝国兵達に嵐のように吹き荒れた。そのためかルーナを殺そうとした男の首が落ちた。だが不思議なことにルーナには一切の脅威はなく彼女を守るようにして風は吹いている。しかも彼女の周りの植物も彼女に反応してか動いている。
「許さない絶対に許さない。お前たちが私の親友を殺そうとしたことを絶対に」
それは先程のテレスと完全に違っていた。元々美しいエメラルド色の瞳は輝き、その身から出す魔力の薄紫色をしたものではなく、青と黒い色のしたオーラをその身に宿す姿はもはや人とは違う何かである。
「ば、ばけもの！」
1人の男が腰を抜かして言う。それは恐怖の顔色である。目の前の先程の弱い少女でないことを理解する。しかもその目からは光が失われている。先程の少女とは別人である。
「陛下が言っていたのはこういうことか！あーなんと素晴らし「これはどういう状況だ？」い？」
隊長格の男の声に被さるようにいきなりその場に聞こえてくる場違いな声に全員が振り向いた。そこには藁で出来た大きな被り物をした異国の剣士がそこにいた。

第3話

突然の乱入者にその場の全員が驚く中でその乱入者である天鬼紫苑は周りの状況を観察していた。紫苑自身は女性の悲鳴が聞こえたために走ってきたのだが金の髪を持つ少女が暴れている。女子の様子から怒りに飲まれているのと倒れている少女がいるのが分かるので男達に襲われていたのがすぐにわかった。怒りに飲まれて力を使ったのか女子の傍で1人の男が死んでいるのがわかる。

ひとつわかることは彼らが男達は国の兵士のようであることだ。何故なら鎧が統一されていることから山賊でないのは明らかだ。女子もボロボロであるがどこかの国の公家か姫かというのが分かる。

「な、なんだお前は!」

固まっている中の1人の尻もちを着いている男がハッとしたように疑問を投げかけた。

「どうやらお主ら女子を襲っているようだが何をしている?」

「お前には関係ないだろ!とっとと消えろ!どうせ悲鳴を聞いて来たのだろうが、残念だなヒーロー被り、こんな所を見られたのなら殺すしかない!数の差は明白だぞ?」

「ふっその子に押されているのに何を言っている」

「黙れ!貴様なんぞに我が帝国の野望を邪魔されてたまるか!」

馬鹿にするように言ったために相手の男達は切れたようで額に皺をせている。しかしそこで固まっていた少女も動き出した。

「貴方たちの野望など知りたくもない、それに貴方たちにその野望を叶えることは出来ないでしょう。何故なら…ここで死ぬのですから」

そう言って少女はその身に宿す力を解放していく。だがその力はその身にあまる力であると直ぐに紫苑は理解した。

(おそらく目覚めたばかりの力であろうな。しかも霊気ときたか。流石にここで止めなければ命を削ってしまうだろう)

男達もその言葉と気配に紫苑から目線を外している。女子の力は強大であったが紫苑は迷わずに少女の元へ行こうと足に力を込める。

「瞬歩」

その瞬間紫苑は少女の目の前に移動した。誰も気づかず目の前の少女ですら認識するのに数秒かかったのである。後ろにいる帝国兵達も驚いている様子で目を見開いている。
少女は助けようとしていたものであったもののいきなりのことで力を使い攻撃しようとした。しかしそれは紫苑の手によって止められた。
「落ち着け、俺はそなたらの味方だ。あいつらは俺が引き受ける」
そう言って紫苑は強制的に少女を座らせた。少女は力が抜けたように座り込みボーっとして紫苑を見つめていた。
紫苑は敵の方を向き、自身のつけている笠を脱ぐとその腰に刺している刀を抜いた。その刀は黒く紫の刃文を宿している。妖しく感じるのに何故か引き込まれるような美しさとその反面何故か恐ろしさも感じる刀である。その刀を見て帝国兵たちも見惚れている。
名を夜叉といい、鬼刀と呼ばれる刀である。
見惚れていた男達もその意識を無理やり外して紫苑を見る。少し警戒しながらも先程の恐怖の対象であった少女が戦わないために少しの余裕が出来た。そのために男達は先程の紫苑の見せた驚異的な速さを軽視してしまった。
「お前のおかげで仕事が楽になりそうだ。そこは礼を言うぞ。どうだ？その女二人を渡せばお前は見逃してやるが？」
「たわけが、助けると決めたのだ。乗るわけなかろう」
後ろにいる一番身なりがいい男がそう言うが紫苑は迷いなくそう答えた。おそらくは隊長である。
「剣聖でもないのに剣を扱うお前が7人と1人の差をどううめる？」
確かに人数差はあるだろう。大抵の剣士ならまだこの人数では脅威だろう。しかし紫苑もそれだけの人数差に負けるほど弱くはなかった。
「どれだけ数を揃えようがお主ら程度の者なら何も恐れることは無い」
「後悔しても知らないぞ？お前らやれ」

リーダー格の男がそう言うと1番近くにいた男が紫苑に向かって走り出してきた。走りながら剣を上に構えるとそのまま紫苑に振り下ろした。
「鬼樹流・鬼舞」
紫苑は振り下ろされた剣を高速で避けて相手の背後をとるとそのまま剣を抜き相手を切り上げた。斬られた男は血を流しながら倒れた。
その技は紫苑が収める剣術であって幼い頃から学んでいたものである。鬼舞は相手の攻撃を避けながら攻撃する技である。
鎧の上から魔力すら纏わずに切ったのに対して刃こぼれを一切していないその技量に帝国兵は少しの恐怖を感じていた。
「次は誰だ?」
「ヒッ!」
残りの6人のうちの1人は紫苑の発する気魄に呑まれて後ずさる。後ろには結ばれた長い髪が揺れている。その髪は黒く赤いメッシュが入っている。
「クソが!お前らいくぞ!」
恐怖に耐えられなかった男が叫ぶと周りにいた2人の男がそれにつられて紫苑に突撃していく。それを隊長格の男はじっと観察していた。
紫苑は直ぐに刀を構えた。
「鬼樹流・鬼舞乱舞」
それは人を殺す技であるのに舞のように美しかった。3人の男達がそれぞれ紫苑に攻撃を仕掛けているがそれを全て避けている。しかも瞬間には斬られている。
鬼舞という技は1人の人間相手よりも複数の人間相手を想定されて作られている技であるのである。しかもそれは舞のように行うために鬼の舞、鬼舞と名付けられたのである。
最初には7人いた男たちはいつの間にか3人までに減っていた。兵士と言ってもしっかりと鍛えられているのでそこら辺の狩人や傭兵よりもはるかに強い。それが4人をものの10数秒で全員が死ん

でしまったのだ。それも紫苑にかすり傷も与えられずに。残されたものに十分な恐怖を与えた。
「た、隊長！無理ですこんな化け物相手に！」
「そうですよ！あんな奴どうしろって言うんですか？」
　自分より格上の者を相手に完全に弱気になった２人は隊長であろう男に不満をぶつけ縋った。しかし仲間であるはずのもの達に助けを求められているのに隊長はまるでゴミを見るよう、あるいは雑草のようなそんな風に仲間を見ていた。すると男は自身の剣を抜いた。抜かれた剣は両刃で真っ直ぐとしていて先程の男たちの持つ同じような剣とは違い重みを感じる剣であった。
「帝国兵の風上にも置けない奴らめ、帝国兵なら命をかけて戦え！」
「ですが我々では対処できません！いたずらに兵力を削るのは避けた方が良いと思われます！」
「そうです！勝てない相手にどうしろと言うんですか！」
「ほう？貴様ら程度が帝国の戦力を語ると？馬鹿どもめ、落ちこぼれの貴様らは精々その命を帝国のために散らせ！それが出来ぬなら俺が殺してやる」
「えっ？」
　隊長は剣を横薙ぎに振り自身に話していた男の首を斬った。ゴキッと嫌な音がして首が落ちる。もう１人の兵士は横を見て呆然と突っ立って居るだけで未だにその状況を理解していなかった。
「貴様はどうする？」
　隊長の言葉にたった一人残された兵士は周りを見るが誰もいない。どうすれば良いのかと聞くことも出来ず今彼の心は孤立している。それがどうであれ彼は動くことは出来ないだろう。何故なら恐怖に支配されているからだ。
「あ、あぁぁぁ！」
　男は振り向くとそのまま紫苑に向かってきた。それは自身が生きるためでもありながら生きることを諦めたようで鬼の形相を紫苑に向けていた。途中で乱入してきた紫苑に対する怒りなのかもしれない。そんな相手に紫苑は刀を構えた。

「死ねぇ！お前が、お前さえ居なければ俺達は！」
　そうして男は我武者羅に剣を紫苑に振った。それを紫苑はいとも簡単に受け止めた弾き返す。
「どの道お主らは死んでいただろう。弱き者を笑いながら襲っていたのであろう？そんな者が死に方など選べはせんよ」
「そんなこと関係ない！俺はまだ死にたくないんだ！」
　それを聞いて紫苑は怒りを抱いた。何故なら覚悟が無かったのだから。死ぬ覚悟も殺したものを背負う覚悟も。自分の意思でここにいるのにも関わらず。自分の意思で無いなら嫌な顔などいくらでもするだろう。しかしこいつは最初は笑っていた。紫苑が王女を落ち着かせた時、その場の帝国兵士は全員恐怖の後安心するでもなく、嫌な顔するでもなく笑っていたのだから。全員が悪意を含めて。
「自業自得だ。死ぬ覚悟が無かったのか？人を殺すなら自分も殺される。命を奪うならそういう覚悟をしておけ！」
　紫苑はそう言うと相手の剣を弾き飛ばしそのまま斬り殺した。
「次は貴様だ。外道」
「おいおい、なかなか辛辣だな」
「仲間を自らの手で殺すとは、しかも死ぬと分かっていて行かせただろう？」
「なに、役立たずが死んで清々するわ。だが俺でも貴様に勝てる気はしないからな。これを使わせてもらうぞ」
　そう言うと男はいつの間にか手にしていた桜色の欠片を見せてきた。そこで紫苑の目は見開き驚きを見せた。しかし直ぐに目を鋭くさせて怒りを見せた。
「貴様ァ！それを何処で手に入れた？」
「やはり驚くか、あの方の言う通りだ。まさかこんな所で会うとはな」
　隊長は紫苑の問に答えることは無くその欠片を飲み込んだ。すると男は一回り大きくなり、その身に着ているは当然ながらちぎれてしまっている。
「グハハハハ、まさかここまで強くなるとはこれなら簡単に貴様を殺せそうだな」

自身の得た力の大きさに嬉しそうに口角をあげた。自身の大きくなった腕を惚れ惚れするように見たあとこちらに目線を戻すとその巨体にものを言わせて突進してきた。その重さのおかげでドスドスと言う音すらなっている。
「貴様はここで終わりだ！」
その隆々とした腕で繰り出された攻撃は普通なら十分な脅威である。しかし紫苑は冷めた目で相手を見る。
紫苑は自身の持つ刀を構え相手を見据える。その目に恐怖を感じたのか隊長格の男も眉をひそめる。しかしなれない力で１度繰り出した攻撃はどうすることも出来ない。
紫苑は繰り出された攻撃をギリギリで避けた。避けた先は地面が割れている。
だが同時にそこにゴトッと何かが落ちる音がした。またぽたぽた水のようなものが男の腕から流れている。
「グァァァ！痛ってぇ！なんだどうなってやがる！」
「なに、貴様の腕を斬っただけだ」
男の右腕は斬られて落ちていた。しかも大量の血を流している。一瞬だった、しかも男は腕が落ちるまで気づかなかったようだ。
「な、なんであ、あれを使ったのにこんな簡単に！聞いていた話と違うぞ！なんで勝てないんだ！」
「借り物の力で俺には勝てんよ」
紫苑はそう言うと男の腹に蹴りを放った。すると大きくなり体重も１００キロは超えていたはずなのにいとも簡単に吹き飛んで近くの木にぶつかった。
「ゲボ、ゲボ、なんでこんな簡単に、貴様はどこまで化け物なんだ！そうだ！あの王女の所へ行った時のスピードも、あいつらを簡単に殺した力も何か俺と同じようにして」
「貴様と同じにするな、あれは俺自身の力だ」
男は恐怖の目で紫苑を見た。その目には先程までの余裕は無かった。
「チクショウ！」

男はそう言って直ぐに紫苑に向けて走ってきた。拳を後ろに引き紫苑を殴ろうとする男、しかし紫苑はそれに対して剣術で無く刀を持たないもう一方の手で炎を出現させた。それをそのまま相手に向けると放ったのである。

その炎が当たると男も足を止めてその炎を消そうとする

「なんだこの炎は！・あぢぃよ！・消えねぇ、触っても消えねぇ！」

「その焔は地獄のものだ。悔い改めろ」

勢いよく燃える炎は直ぐに男の全身に周り一瞬のうちに燃え尽きた。後に残ったのは灰と先程男が飲んだ欠片である。

紫苑は男の灰に近づくとそのまま桜色の欠片を手に取ると自身の持つ袋に入れ先程の少女の元へと戻って行った。

すぐそこで戦闘を行って居たために直ぐに少女の居場所が目に入った。しかし少女は先程の戦闘で少し警戒をしているようだ。

（助けたとはいえ得体の知れない男をそう易々と信じられるわけないか）

「大丈夫、俺はそなたを傷つける気は無い」

紫苑は少女を刺激しないようにゆっくりと近づいた。しかしこちらを睨み警戒をとくことは無かった。

「それ以上近づかないで！」

「!?」

少女の声に反応して周りの植物が紫苑に襲いかかる。だがそれは紫苑の体ではなく足元を貫いた。つまりはここから先には近づくなという彼女の絶対領域であることを表していた。それでも紫苑はその警告を無視して歩き出す。何事も無かったように。敵意すら向けずに進んでいく。

「お願いだから来ないで！」

彼女の叫びと共に今度は刃とかした風が飛んできた。紫苑の体を刃物レベルの斬れ味で斬り裂くために紫苑の体は血が流れ始める。

紫苑は少女の前に着くと片膝を地面につき少女の肩に触れた。
「安心しろ。そなたもソナタの友も傷つけるものはこの場にはもう居ない。だから誰かを殺す必要はないのだ」
不器用な笑みを浮かべながら紫苑は彼女の前で安心させるように言う。すると彼女は目線の定まらなかった目を紫苑に向けた。
「もう大丈夫なのですか？」
「そうだ。何も心配はない」
その瞬間紫苑を信じくれたのか彼女は糸が切れたように意識を失った。隣に倒れる少女も眠っているだけのようなので大丈夫だと思われる。
そこで紫苑は考える。
（あの力、霊気は人の持てる力ではないはずだが…俺と同類なのか…）
紫苑が自身の考えに沈んでいると大きな光の玉が近づいてきた。その光の玉には意思が感じられた。
「～彼女を守って～」
「…何？それはどういうことだ？」
「～あなたはわかっているはず～」
「それはそうだがなぜ俺に頼む？」
「お願い」
「わかった。助けたのは俺だ。最後まで面倒は見る」
光の玉は紫苑が肯定の意志を言うと幻だったかのように一瞬で消えた。紫苑は少女を達を見て死体のそばに置いておくのは流石に可哀想で安全なとこまで連れて行こうと思ったのだが。
「貴様！その方たちに何をした！」
「誰だ？」
紫苑が怒声のした方を見せると火のごとく顔を赤く染め怒りをあらわにした表情でこちらを睨む騎士がいた。

第４話

（速く、もっと早く斬らねば！）

桃色の髪をなびかせながら敵を倒し、血を浴びながらクリスは焦っていた。自身の護衛対象であるテレスとルーナを逃がした。そして敵兵を倒して直ぐに追いかけようとしたが次々と来る敵に苦戦しなかなか２人の元へ向かえないでいた。

クリスは城が襲われたあの日１人主君である王に呼ばれテレスを守るように命令を仰せつかった。その命令道理に仲間である騎士団と別れて帝国兵に渡さないように隣国へと逃れようとした。しかし敵にはその情報が既に知られていたのか網がはられていて自身の至らなさがあの二人を危険に合わしてしまった。だから先に逃がすと言う選択をしたのだが失敗だったのかもしれない。

（それに私はあの方を…いややめておこう今は集中しないと）

先程聞こえた悲鳴に焦らされながらクリスは目の前の敵を切り伏せる。だが先程から敵への手応えを感じなくなって来ていた。最初は普通であった。いつの間にか敵の死体は増えなくなっていた。

（何かおかしい。何か見落としている気がする）

クリスがそれに気づいたのは偶然だった。普段の彼女なら直ぐに気づいただろう。しかし今の彼女は数日の魔物による連戦と警戒のためにあまり寝ていないという最悪な状況によりまともな考えが出来なかった。それは倒れている死体が無いと言うこと、つまりは倒れた死体がまた立ち上がりクリスを襲っているということ。しかも落ちている死体は全て使われるというものではなく気づかれないようにクリスの視界にあるものは一切使われていないという念入りなもの。

死体を操るものは２種類あり１つは死霊術師（ネクロマンサー）と呼ばれる死体を蘇らせてゾンビなどにして使役するものであり、もうひとつは人形使い（ドールマスター）と呼ばれる魔糸を使い人形や死体を意のままに操るものである。

これはどう考えてもゾンビ等では無く、完全な死体、つまりはドールマスターという事になる。ドールマスターはネクロマンサーと違

い必ず近くにいないと操れない。だからこの近場でクリスを見ているはずであった。
　クリスは敵の攻撃を避けながら目に魔力を込めて魔力視と呼ばれる目を強化する魔法を使った。これは目を強化するだけで無く他にも魔力を宿すものや魔力そのものを見ることが出来るようになる魔法であった。相も変わらず襲ってくる敵を斬りながらクリスは集中する。
（見えた！木の上に魔糸が集中する場所が！）
　術者の場所に直ぐに魔法を放とうとすると周りにある死体がいっせいにクリスに襲いかかった。クリスはそれに対処すべく剣に魔力を込めた。その魔力は全てを吹き飛ばすべく風の属性に変化を遂げる。
「付与魔剣・風翔閃」
　クリスは剣を構え横に一閃する。すると風の暴力が死体を全てを吹き飛ばした。
　クリスは飛ばしたものを気にすることなく先程の位置にまだ術者がいることを確認すると魔法を展開し放った。
「ライトニングランス！」
「グアァァァ！」
　放った魔法が術者に直撃すると断末魔が直ぐに聞こえてきた。それっきり死体がクリスを襲うことは無かった。安心して力が抜けそうになるが直ぐにテレス達の元へ行くために倒れないように気力で立つ。限界は近いがクリスは倒れる訳には行かなかった。
「あそこにテレスティーナ様達が居るはず、急いで行かなければ」
　クリスは先程大きな力の波動があった場所へと向かっていった。それは何か確信のあるものでクリスの感がそう言っていた。

紫苑ｓｉｄｅ

（あれは…この女子（おなご）らの護衛か？）
目の前で般若の如く怒りを顔に出す桃色の髪の騎士を紫苑は冷静に観察した。体に血は多く着いているのに一切の傷が見えず相手の騎士の実力が高いと紫苑は考えた。
（大方この護衛が囮になったと言ったところか…意味は無かったようだが）
「おい！貴様聞いているのか！」
紫苑は女騎士自体が警戒することは仕方ないと思いつつも自分は助けようとした身であるために説明を試みた。
「聞いておる。だが俺はこの者らを助けようとしただけだ」
「そんなこと信じられるか！怪しいヤツめ！」
本当のことを言っている紫苑であるが一切信じて貰える様子はなかった。
（敵と戦ったことでの疲労で焦っておるのか？）
そこで紫苑は落ち着き彼女らを襲った兵士と無関係である事を伝えようとした。
「…お主らを襲った兵士は服装を統一されておるな？」
「それがどうした？」
「俺と明らかに違うでだろ？その時点で俺とその者らの関係は皆無だ」
「そ、それはたまたま服装が…」
「わざわざ俺だけと言うことはあるまい。そもそも国が違う俺は東方の出身だ。それとこの者らが死んでおって俺だけ生きておるのもおかしかろう？」
紫苑は理解してくれと思いながら彼女を見る。すると彼女は少し考える素振りを見せた。
「…確かに貴方の言う通りだ。状況から見て貴方が助けてくれたようです。すみません言い訳になりますが疲労が溜まっていて…」
女騎士は周りを見るとこちらに頭を下げて言う。紫苑は良かったと思いながら彼女に警戒させていることに気づく。
「とりあえずここを離れようか。このままではまたこやつらが来てし

まうぞ」
そう騎士に言おうとしたら突然女騎士が倒れてしまった。何事かと紫苑は直ぐに様子を伺いに行く。何かあったのかと心配しているとどうやら気絶しているようだった。仕方の無いことだ。囮になりそれが終われば直ぐにここに駆けつけたのだ。しかも見た感じでは汚れや古い血の着いた鎧を見ればここ数日無理をしていたのが分かる。疲労は溜まるだろう。
「1人で運ぶのは流石にきついか…」
紫苑はそう言うと懐に手を入れ1つの札を取り出した。そこには中心に五芒星や他にもいろいろと書かれていた。これは札で魔法で言う杖のような触媒になる。杖は術の威力向上や補助などの役割がある。紫苑が今からしようとすることは彼にとって苦手なものであるために出したのだ。
紫苑は札を顔の前に持ってくると言葉を唱える。
「我と契約を結びし者、我が身に力を貸したまえ。
我、契約の名のもとに血と霊力を。
汝、契約の名のもとに力と知恵を。
汝が望む代償に沿うならば我が望みに応え謁見せよ!」
紫苑がそういう中で札は輝いていた。紫苑はそれを地面に向けて投げると術式が広がり強い光が現れた。
光の中には狐の耳と尻尾の影が浮かんでいた。

第5話

（暖かい…ここは何処なのでしょうか？）

テレスは目を覚ますと野原に居た。そこは暖かく光や優しさに満ち溢れる場所であった。目の前をボーッと見るテレスには記憶にない場所でどこにも見覚えのないのに何故か安心してしまう。自身の記憶を思い出しても先程までは森に居たはずでこのような花が咲いている場所ではなかった。

そこはとても綺麗な場所でテレスに程よく暖かく優しい日差しが当たっている。立ち上がろうとする彼女の足には何故か力が入らずその場を動くことは出来なかった。

何も出来ないテレスは辺りを見渡すということしか出来なかった。不意にテレスは後ろを向いたのだがそこには大きな樹があるだけで何もない。しかしその樹には何故か懐かしさを覚えてしまう。

不思議と混乱はすれど慌てることはなかった。そのまま目の前の美しい光景に見惚れているとテレスの名を呼ぶ女の声が聞こえてきた。

「テレスティナ、私の可愛いテレスティナ、ほらおいで」

声がする方を見ると花が周りを舞いながらこちらに手を伸ばす女性が居た。人間では無いのがその神々しさからテレスは直ぐに理解した。

その女性の顔は美しく、何処か見覚えの感じがした。女性の姿や声が存在が先程の樹のようにテレスの心を刺激してくる。

（全てが懐かしい。私の記憶には無いはずなのに）

テレスはこの光景全てに愛おしさを感じるのだが何も分からない。それがテレスの心を悲しくそして寂しく感じさせていた。

テレスが色々と考えていると女性は振り返り離れて行ってしまう。

（嫌！行かないで！）

動かない足を無理矢理動かそうとするのだが動けず引き止めるための声を出そうにも一切の声を出すことが出来ず、テレスの意志を否定するかのように体は邪魔をしていた。

そこにあるのに石のように動かない足を睨みながらテレスは遠ざかる女性の背中に手を伸ばした。届かないその手が虚無感をテレスに与えると同時にテレスの感情を爆発させた。
「行かないで、○○!」
自分で出した言葉のはずなのにノイズが走ったように最後の単語を聞き取ることは出来なかった。しかし女性にはテレスの声が聞こえたのかテレスの方に振り返り万遍の笑みを浮かべながら手を振っていた。
「ありがとう!」
その声とともにテレスの意識は闇の中へと瞬時に落ちて行った。

「ああ、すまぬな。助かった」
暗い夜の森で紫苑の声が響く。そこは先程の場所とは違うようで先程の兵士の死体などは一切なく、月の光が照らす位には場所が開けた所であった。
話している相手は知り合いのように慣れ親しんでいるように話している。ちなみに女性である。
月光に晒され黒く輝く髪とその大和撫子と言えるような綺麗で清楚な顔立ちをしている。その雰囲気は美少女よりも美人が似合う。しかしその狐の耳と尻尾は彼女が
相手の名は狐月八重香(こげつやえか)と言い、先程紫苑の召喚術により召喚された式で少女達をここまで連れてくるのを手伝ってくれたのである。
「そないに思うならうちにご褒美くれてもいいんよ?せっかく主様に呼ばれて楽しみにしとったのにこないな女共の世話やら、うちガッカリやったんよ?」
紫苑の言葉に微笑みながら言う。嬉しさを含みながら言うが最後の一言は少し棘があった。
「そう言うてくれるな。こやつらも好きでこんなことになっている訳

では無いだろうから。しかしそうだな、お主も忙しいだろうに世話になったしな」
「もぉーそないなことちゃうんよ。うちは主様にこき使われんのは苦に思わんさかいにこき使うてくれていいんよ?」
「では何に怒っておるのだ?」
「そんなん決まってるやん。せっかく久しぶりに会ったのに若そうな女子と一緒にいるさかいにこっちは怒っとるんよ?主様の節操の無さに!」
「なっ!それはこやつらが困っていたから…」
「分かっとるよ。主様が困っている人には甘いことは。昔から命を弄ぶような人には容赦がないお人やけど子供や精一杯生きようとする人の不幸は見過ごせない。そんな甘々な主様やからこそうちはあんたと契約したんよ。あっ!主様顔真っ赤やん。可愛ええなぁ」
八重香の純粋な言葉に顔を赤くしてしまう紫苑は八重香にからかわれたことでそっぽをむいてしまう。そんな姿を八重香はおもちゃを見る子供のように笑顔を向けながら指摘する。
「や、やかましい!そんなことより褒美が何がいい?」
紫苑は言い返すことが出来ないために強引に話題を変えた。悲しきかな主であるはずなのに遊ばれるのは。
「もぉー恥ずかしがって~まぁいいわ。そやなぁうちが望むんは…」
「望むのは?」
「主様と一緒に旅をさして欲しいなぁ。あっ!でもあかんのやったらいいんよ?また呼んでくれたらそれでもいいんやしな」
先程の人を遊ぶような雰囲気とは違い真剣に話している姿は乙女。しかし断られると思ったのか直ぐに自分で逃げ道を作ってしまった。しかし紫苑の言葉は八重香の思うようなものではなく軽いものであった
「ん?そんなものでいいのか?いいぞ」
「そらあかんよな?主様の旅は…え?今なんて言うたん?」
「だから良いって言うとるだろう」
「ホンマに!ホンマのホンマに良いんやんな?」

「お、おう」
　余程嬉しかったのか興奮気味に聞き返す。紫苑はそれに少し引き気味に答える。
「良かったぁ。主様にとって大切な旅やし断られると思ってたわ」
「ああ、少し難航しておるがそこまで困ることは無い。それにお主なら旅に邪魔になることもあるまい。ただし1つ条件がある。」
「条件？」
「あぁ。当分お主は狐の姿でいてもらいたい」
「いいけど。なんでなん？」
「こやつらにお主の説明をすると少し面倒だ。まだ俺のことを信じられんだろうからな。信じられんやつが2人も居たら気が休まらんだろう？」
「分かった。じゃあ狐の方になっとくさかいによろしゅうな」
　八重香はそう言うとポンっと言う音が聞こえ辺りに煙が飛んだ。煙は風に飛ばされ直ぐに消えたがその中には八重香は居らずに白い狐が居た。それは紛れもない八重香であるはずなのだが人間姿の黒い髪とは真反対の白である。しかも9本の尾を持っている。
（まだそなたは自分を騙すのか…）
　少し悲しそうに八重香を見つめる紫苑は直ぐに表情を戻しその思いを飲み込んだ。
「よし、なったって八重香よ、尾は1本にしとけ。9本は流石に怪しまれるぞ」
「キュー」
　八重香が返事をするように鳴くとまたポンっと音が鳴った。今度は9本ではなく1本であった。
　紫苑は八重香の姿を確認すると薪を集めに向かった。もう日は暮れてしまっているので紫苑は飯を作ろうとしていた。
　八重香はその間に倒れて眠る少女達を守るように3人の前に座り込み見守っていた。
　2人は何も言わず自分達の役目を遂行する。

第6話

「本当に申し訳ありませんでした！」
そう言って女騎士は頭を下げた。見事な土下座で起きたてとは思えないほどの見事な速さであった。
日が暮れる前に薪を集め終えた紫苑は夕食を作っていた。具材を切り、鍋に水を入れ煮込み味噌を入れる。野外なのでそこまでの物を作るのは無理なためそこまで凝ったものは作れない。それに紫苑自身もそこまで料理が上手いわけではない。ある程度の器具があっても一般のものしか作れない。あるひとつを除いては。
そうして鍋もどきが完成した時不意に女騎士が起き上がった。女騎士は警戒したように辺りを見渡したあと紫苑と目が合った。警戒していたようだが目があって数秒みるみる顔を青くしたと思うと立ち上がり土下座をしてきた。
（もう少し寝てると思っておったが早いものだ）
「少し落ち着け、一体全体どうしたのだ？」
紫苑がそう質問すると顔を赤らめた女騎士は顔を横に横に背けて恥ずかしそうに話し出した。
「そ、それはそのぉ、先程私は貴殿に恩を仇で返すように突っかかり貴方を斬ろうと仕掛けました。王女様達を助けて貰ったのは周りの状況をしっかり見ていたらすぐに分かった筈です。それを無視してしまったのは疲れていたとはいえ騎士として恥ずかしい」
どうやら騎士としての誇りを大事にしているようだ。あのまま起きて突っかかって来ることも無く、自分から謝ったことには驚かされる。正直謝る程のこととは紫苑は認識していなかった。騎士とは紫苑の国で言う侍に近い。主君のためを思うのは大切なものである。
「ああ、確かにいきなり突っかかって来たな」
「くっ、改めて言われるとキツイですね」
「だが気にする必要はないぞ。俺も似たようなことが起これば同じことをしていただろう。疲れていて焦っておったのだろう？主を持つものとしてなら良い事だ。逆に信じ過ぎるのよくあるまい。謝るよ

うな恥に思う必要はない」
　囮になる時、死んで守ることは誰にでも出来る。しかし生きて誰かを守ることは難しい。囮とは死ぬ可能性が高いのだが生き残っていても疲労は溜まるだろうことは明白である。
「敵なら既にこの状況がおかしいことです。起きて貴殿との会話を思い出しました。…どうか謝罪は受け取ってください。恩人に剣を向けたのに謝罪すらしないのは私の騎士の誇りにも関わります」
　再度頭を下げる騎士にため息を吐いた。こうも頑なに言われても紫苑としてはそこまで言われるようなことでは無いため受け取りにくい。どうするか悩んでいるとペシペシと八重香が騎士の頭を叩いている。女騎士も突然の事で驚いていた。
（八重香よ、何をやっておる）
　紫苑は八重香を手でこちらに来させると膝の上に乗せて捕まえた。流石にあのままにしては置けなかった。だがこのままでは埒が明かないのもそうなので紫苑は自身が折れることにした。
「謝罪は受け取ろう。だがまだ警戒しておるのだろう？そこまで謝る必要はなかったのだぞ？」
「気づいていたんですね」
「あったばかりのものを完全に信用するなど無理な事だ。…それにお主の気が張っておった」
　最初、女騎士は警戒していた。それは謝ってきていても変わらなかった。それにときおりこちらを伺うように何回か見てきた。信用出来るか見ているのだろう。謝ったのも様子を見るのもあったのかもしれない。
　初めてあったばかりのものを簡単に信用するなど不用心にも程がある。しかも敵に襲われた後なら余計だ。そんなことを王侯貴族の護衛をする騎士がやるわけがない。するなら余程のバカかお人好しだ。
「すみません。わかり易すぎましたか？」
「気にする事はない。仕方の無いことだ」
「恥ずかしい限りです」

警戒は崩さず気は少し張っていたがそれでも少しは信用してくれたのか緩くはなった。そう思っているグゥ～と音が鳴った。紫苑が音源へと顔を向けると女騎士が湯気でも出るのではと思うぐらいに顔を真っ赤にさせていた。辺りには味噌のいい匂いが漂っていて食欲を誘うには十分なぐらいだ。
「そろそろ飯にするか。そなたも腹が減っておるだろう？食え」
紫苑がそう言うと女騎士は顔を赤く染めたまま考えるように首を傾げた。
「どうした？まだ信用ならんか？」
「…いえ、テレスティナ様達が起きてからにして頂きます」
「それには及ばんよ。その２人ならそこでお主のことを見ておるぞ」

「えっ？」
紫苑が女騎士の後ろに目線を向けた。それに合わせて彼女も後ろに振り向くのだがそこには眠りから覚めて座っている２人の少女が居た。
女騎士がその光景に固まると気まずい空気が流れる。
それから少し時間が経つと女騎士が動き出す。
「テレスティナさまぁ?!い、いつの間に！」
飛び上がりそうな勢いで驚く女騎士は先程までの堅物そうな顔を崩してしまっていた。
「えっと、そのクリスティン様が土下座をしたあたりから…です」
テレスティナと呼ばれた金髪の少女が答えた。少し遠慮気味に言っている。対して隣の銀髪の少女はお腹を抱えて笑っている。
「アハハハハっ私の騎士としての誇りに関わる」
「あぁー辞めてください。恥ずかしすぎますぅ。忘れて下さい。お願いします」
真っ赤に頬を染めて泣きそうになりながらどうにかやめてもらおうと必死にお願いしているがやめる様子は一切ない。銀髪の少女が小悪魔に見えてくる。あたふたとしている姿はどうにか気持ちを抑えた腹の音が鳴った先程の騎士の姿とはまた違っていた。

「テレスティナ様からもルジアーナ様に言ってください！」
「えっと、頑張ってください！」
「ぞんなぁー」
自分では止められないと思ってか主に助けを求めたようだがテレスは止める様子もなく見捨てられてしまった。捨てられた子犬のような絶望を味わっているだろう。
「そろそろ飯にしよう。お主らも腹が減っているだろ？」
紫苑は飯が冷めてしまうと思い会話に割り込んだ。そのために少女のからかいも終わり女騎士、クリスティンからは感謝のこもった眼差しが送られていた。
そうして皆が鍋の周りに集まると紫苑は自信の作った料理を振舞った。

第7話

「そのようなことが…」

飯を食いながら自己紹介をして、事情などをあらかた聞いた紫苑はそう声を漏らした。その間にも3人の少女は久しぶりなのか嬉しそうに食事を食べていていつの間にか無くなっていた。

どうやら数日まともな物は食べられなかったようで暖かい食事は久しぶりのようだった。紫苑自身も美味しく食べられている姿に作ったかいがあったと思って硬い表情筋が自然に動き柔らかい笑みを浮かべる。

飯を食いながら事情を聞いた紫苑に最初は言いにくそうにしながらテレスティナが口を開き話し出した。

城がいきなり奇襲を受けて陥落したこと。

クリスティンが抜け道から逃がしてくれたこと。

抜け道の入口がこの森にあったこと。

帝国の皇帝が自分を狙っていること。

などと色々だった。

そこで紫苑はふと、3人の服装を見た。テレスティナ、ルジアーナが来ている服は綺麗に見せるだけの機能性に優れない服でその目的である綺麗さは今では見ることすらできないほどにボロボロで汚れている。クリスティンに関しても守ることに優れた鎧では有るのだが長旅には不向きであるし既にボロボロである。それだけでここ数日の苦労が見て取れる。よくそのような服で持ったものだ。

それ以外にもどうやって帝国の兵士達は気付かれずに城まで移動出来たのか。それ自体が謎である。国境は守られているはずだし連絡もなくいきなり落ちたというのが不自然すぎる。紫苑は傍にいる式を撫でながら考えた。そこで紫苑は3人のこれからに着いて聞こうと質問をした。

「それならここからどうするつもりだったのだ？」

そこで質問に答えたのはクリスであった。

「それは私が話します。私は陛下から隣国のライオネス王国に亡命す

るように命令されております。ですのでこの森を迂回する形で行こうかと思っていましたが…」
「先回りされて待ち伏せされていたと？」
「ええ、抜け道を通ったのですが結局はそうなりました」
「ではこの後はどうするつもりだ？」
「……正直何も考えていませんね」
俯きながらそういう姿は本当に先をどうするか迷っているようだった。準備もすることも出来ず最短で行くのが前提で来たため旅をするなど長期の自体に備えられずやろうとしてもこのままでは不可能。このまま進めば帝国兵にまた待ち伏せられていることは確実で引くとこと進むことも出来ない。
「ひとつ聞いても良いか？」
「？…どうぞ」
「行こうとしておったのはこのまま森を回っていく道か？」
「そうですがそれが何か」
「ならひとつ提案をさせてもらおう」
「提案ですか？」
クリスティンは首を傾げていた。
「ああ、まずは街に行って準備をする。そしてこの大森林の中央を通るそれだけだ」
帝国に見つからずに行くならアルゴス大森林を直進するしかない。普通なら迂回する道しかない為に待ち伏せは簡単にされる。なら違う道を行くだけでいい。普通なら使わないような道を。だがアルゴス大森林を抜けるにはテレス達の服装はボロボロすぎる。何かあった時のためにも準備は必要である。しかしクリスはその答えに目を見開き否定の意を示した。
「なっ！大森林を抜けると言いましたか？それは流石に無茶ですよ。貴方がどれだけ強くても危険です。この森の奥に行ったもので帰って来た者はいません！それに街によるですって？無理言わないで下さい。帝国兵達の巣窟になっているはずです！」
クリスの言う通りアルゴス大森林は中心に行くほど危険で浅い部

分ならまだしも中部からは未開の地で多くの者が挑んだが誰もが帰って来なかったと言うぐらいである。しかも帝国兵はこのような場所まで迫ってきている。近くの街にも既に駐屯しているだろうし顔の割れている一行で街に行っては直ぐにバレてしまうだろう。だが紫苑は何処吹く風で聞く耳を持たなかった。

「大丈夫だ。心配には及ばんよ。森の深層には行ったことがある。それに街でも見つからない方法ならあるからな」

紫苑の軽い言葉に納得出来ないのかクリスは睨んでいた。それは仕方がないことである。会った初めて会ったものを信用そしろと言う方が無茶だ。テレスとルーナの2人もお椀を持ちながらことの成り行きを見守りながらどうしたらいいのか考えているようだった。

「初めて会ったものを信用するのは難しいと思うがどうかこの通りだ！俺を信用して欲しい」

紫苑は信じてもらうために精一杯頭を下げて信用してもらおうとした。そんな中クリスは悩んだ末にテレスの方を見た。1人では決め手は行けないと思ったのだろう。テレスはその意志を察して答えた。

「少し3人で相談さして貰えませんか？」

「ああ、構わない」

紫苑がそう言うとテレスティナは他の2人を呼んで円になって話し始めた。

テレスティナｓｉｄｅ

「ねぇ、どうするの？」

円になるようにして集まった3人で最初に話したのはルーナだった。そしてその問いに対してテレスは考える。テレス自身紫苑のことを完全に信用出来ないものの信用したいと思っていた。しかしそれは簡単にはできない。

何故わざわざ自分が危険になるのを分かっていてテレス達を助けようとしているのか、それが分からない。
「あの者は悪人では無いとは思うのですがまだ会ったばかりの者を信用しろと言われても流石に…」
「そうだねぇ、でも私はあの人を信用してもいいと思うよ」
「仮に信用出来る者だとして、大森林の中央を抜けるという話を聞くのですか？」
どうすれば良いか皆が迷う。テレスはそんな中で意見の言えない自分に落ち込んでしまっていた。自分には何も出来ないと決めつけて少し気が落ち込んでいる。
「テレスはどう思う？」
「わ、私は…」
ルーナから話が回って来てもテレスは答えることが出来なかった。
（何も出来ない守られてばかりの私が意見を言うなんて、しない方がいいんだ……）
（ふん、あんさん見たいな人のために主様は手を貸そうとしておらはるん？あるじ様が可哀想やな）
（だ、誰？）
不意に頭の中に聞こえてきた声に反射的に心の中で聞き返してしまった。頭の中で聞こえた声なのでもちろん２人には聞こえていないようだった。
（うち？うちはそうやね、主様のお嫁さん候補と言っておくわ）
陽気で嬉しそうな声で聞こえてきた。
（お、お嫁さん。なるほどその主様って？）
（あんさん察しが悪いお人やね。まぁ良いわ、うちがそういう風にしたんやししょうがないな。それよりあんさんさっさと答えんでいいの？）
まるでテレスを諭すかのように優しいようなそして妖しい雰囲気で言葉は紡がれる。
（答える？何をですか？）
（そんなんあの銀髪、ルジアーナと言ってはったね。その子の問にど

う答えるんってこと）
（私にはそんなこと答える資格は……）
（資格うんぬんの話ちゃうと思うんやけどな？）
　相手の女性は呆れたように言った。しかしそんなことはお構い無しにテレスのネガティブ思考は続いていく。
（だって護られてばかりの私に何かをする権利なんて…）
（さっきから聞いてたら後ろ向きな話ばっかやな。そんなん聞きたないわ）
　痺れを切らしたのかテレスの発言をバッサリと切るように強めに女性は遮った。
（じゃあどうしろと？約立たずの私には選択肢なんてないんです!?）
（そんなんあんさんの意見やろ？あの子らはあんたの意見聞きたがってんのちゃうの？）
（えっ？）
　そう言われてテレスは２人の方を見た。２人は静かにジッとテレスの答えを待っていた。
（やっと気づいたんね。ならもうあとは自分でおやりね）
（ま、待って！せめて名前だけでも！）
（うちの名前？うちの名前はね狐月八重香よろしゅうな）
（ありがとうヤエカ様。）
　てれすがふと後ろを見ると狐が走っているのが見えた。それを見て彼女が何者なのかを少し理解した気がした。
（私は気づいてなかったんだ。私を見ていてくれる人を、忘れてたんだ私を必要としてくれてる人を。なら私は答えなくては行けない。だから私は覚悟を持つ。私を見てくれる人のために。）
「すいません、少し考えていました。私の意見ですね？私は彼の提案を飲むべきだと思います」
　今度はしっかりと自分の考えを伝えるようにはっきりと声を出した。
「本当に大丈夫ですか？あの方自体が信用出来てもその考えに信用を持つことは出来ません！」

クリスが言うことは最もで例え人柄が信用出来てもその人の考えがあっているとは限らない。どれだけの人格者でも間違えを犯さないことはないのだが。だからこそ紫苑が信用出来ても彼の考えが最善かは別の話だ。
「確かに信用に値する人なのかまだ分かりません。ですが今の私たちには選択肢が残っていません。だから今は彼を信じるしか選択肢はありません！」
テレスはキッパリと自分の意見を言った。先程のように迷いでどもることも無く落ち込むことも無く自分の考えを2人に伝えたのだり
「うん、テレスの言う通りだよ。ここはやっぱりあの人を信用しようよ！」
ルーナが笑顔で賛成した。
2人は後のクリスをジッと見つめた
「テレスティナ様、貴方がそう決めたのなら私はそれに従いましょう。今の私は貴方の従者なのですから。それに私の言葉は貴方の考えの参考程度になればいいのですから」
そう言って彼女はテレスに片膝を地面に着き忠誠を誓う姿勢を取ったのです。
（ドウイコトデスカ？）
「私の誇りはあなたと共に。我が忠誠を貴方に捧げます」
クリスは自身の剣を地に刺してテレスの前に跪き誓いの言葉を述べた。それは騎士の忠誠の儀式であった。
それは自信の主と認めた人に対して行うものであった。
テレスはどうすれば良いかわからず思わずルーナの方を見たが笑顔を向けられるだけであった。おそらく自分では決めろと言っているのだろう。
「ありがとうございます。貴方の忠誠は確かに受け取りました。そうそう今決めたのですがクリスティン、いいえクリス私は貴方を愛称で呼ぶので貴方も私をテレスと呼んでください」
「あ、じゃあ私はルーナって呼んでね」

テレスの最初の言葉に笑顔を向けて答えたクリスであったが最後の部分で固まってしまった。何故なら騎士として主を愛称で呼ぶなど無理なことであった。なかなかできるものでは無い。特に忠誠を誓った相手になら尚更だ。それにルーナも一緒になると別段と難しい。

「む、無理です！流石に主を呼び捨て、しかも愛称で呼ぶなど…」

「これは命令です。テ・レ・スと呼んでくださいね？」

「ではテレス様と。流石に呼び捨てはご容赦を」

「まぁいいでしょう」

「ねぇ、私は？」

「ルジ、ルーナ様」

流石に呼び捨ては無理だったようだが主であるテレスの圧により愛称のまま様をつけてどうにかしたようだ。それに納得して嬉しそう親友コンビは笑顔を浮かべる。

少し話しが脱線しながらもテレス達は決断を紫苑にどうするかを言いに行った。

「八重香め要らんことを言っておらんだろうな？」

相談をするために少し離れたところにいる3人の中で少し暗い雰囲気を出していたテレスに助言をするためなのか向かって言った八重香の行動を心配しながら紫苑は座って待っていた。

紫苑が心配しながら様子を伺っていると八重香が走って帰って来た。

（ただいまぁ）

「何をしておった？」

（そんな心配しんでもただ様子見してただけやん）

呆れたように言っているが雰囲気は楽しそうで何か言ってきたことは確実であると分かる。しかしそこは信用して何も言うことは無

かった。
彼女達が相談をしている間紫苑は八重香を撫でながら待っていた。気持ちよさそうに膝の上を八重香は転がる。
そうしていると少し話が脱線しているのではないかと思うような声が聞こえて来て本当に大丈夫かと心配してしまう。するとまたクリスが弄られているのか遠目から見ても分かるぐらいに顔を赤く染めていた。
少しして彼女達の意見はまとまったのかこちらに近づいてきた。
「私達はその提案を呑みます」
それを言ったのはクリスでは無くテレスであった。先程よりも凛々しい顔立ちをしていて決意が決まったような様子が伺える。一体何があったのかと思ってしまう。
（八重香よ、今回は大丈夫で良かったぞ。）
「了承した。ではまず俺の名は天鬼紫苑と申す。気軽に紫苑と呼んでくれ」
紫苑は頭を下げながら自己紹介をした。名乗っていなかった名を彼女達の決心が固まったことで名乗ることにした。
「分かりましたシオン様。私の名前はテレスティナ・アレフテストと言います。テレスとお呼び下さい」
金髪ロングの少女のらテレスが自己紹介をした。優雅にお辞儀する姿はボロボロの姿であってもその気品が垣間見える。
率直で丁寧な子だと印象を受ける。
「私の名前はね、ルジアーナ・ルベリオス。気軽にルーナって呼んでね？シオンさん」
銀髪ショートの少女のルーナが自己紹介をした。こちらは少しぎこちないものの元気で明るい雰囲気を醸し出している。
元気で明るく活発な印象を持つ少女だ。
「私はテ、テレス様の従者であるクリスティン・アルセフトと申します」
桃色の髪ショートの女性が自己紹介をした。普通のお辞儀であったもののそこからは若いながらの気高さを感じさせるものであった。

先程と違い愛称で呼んでいる姿は慣れていないからかぎこちないものの頑張っているようだった。それだけ親しくなったということだろう。
（しかしこの者は普段は真面目な者と言う印象だが、１度崩れるとダメになるな。今は良いがそのうち…だな。）
そんなことを思いながら紫苑は普通に挨拶を交わす。
「ああ、よろしく頼むよ皆」
紫苑はそこで直ぐに寝ようと言いたかったのだが説明しないといけないためにそれをしなかった。真剣な表情をしてテレスを見る。
「直ぐにでも寝て明日には街に行こうと言いたいのだが」
紫苑のその言葉に何かと3人が疑問を持ったようで首を傾げたり、紫苑をジッと見たりと反応はそれぞれだ。
「テレスよ。お主は自分の持つ力を理解しておるのか？」
横にいたクリスとルーナがテレスを見る。しかし質問をされた本人も何か分かっておらず困惑している。それもそのはずでテレスには先程の力を行使した記憶を持っていない。そのために自身の力を一切と理解していなかった。
「分かっておらぬようだな。なら俺が大体のことは教えてやろう」
そう言って紫苑は彼女らの知らないであろう知識を説明することになった。

第８話

「私の力ですか？」
　テレスは疑問たっぷりの目線と声質で答えた。それを見て紫苑はテレス自身が先程の力を行使したことを覚えていないことを察した。しかし紫苑はそこに触れることは一切なくそのまま話を進めた。
「そうだな。まず人と言うものに備わっている力は分かるか？」
「魔力のことですか？それなら私には存在すらしてませんよ？」
　紫苑の問に答えたテレスは何が言いたいのかわからないように言った。
　この大陸の常識では人間の宿すエネルギー的な力は魔力と言うものだけだ。そのためこの大陸の人間に同じ質問をしてもテレスのような回答になるだろう。しかしそれはこの大陸だけなのである。
「確かにこの大陸では殆どの人間には魔力と言うものが備わるだろう。しかしこの世界にある力とは決してそれだけでは無い」
「そんな力があるのですか？」
「魔力以外にも私達に備わる力があると？」
「そんな力聞いたことがないけど」
　三者三様の反応を紫苑に向ける。３人とも疑うように紫苑を見ている。
「ああ、そうだ。基本的に人が宿す力は生まれた時に決まる。血筋で持つ力は決まるからな。それに俺も魔力などは持っておらん。しかしこのような術は使える」
　そう言って紫苑は少し離れたところに結界を作った。それを見たルーナとクリスの２人は驚いた表情を浮かべるのだがテレスはわかっていないようでキョトンとしていた。
「なっ！魔力を一切感じなかった」
「えっ？そうなのですか？私には何も…」
「うん。クリスの言う通りだよ魔力は一切感じなかったよ。けど何か別の感じがしたような気がする」
　何も違う力だからといって他の力を感じられないことは無い。だ

からこそ魔力を操る2人にも紫苑の出した力を感じ取ることは出来た。
紫苑は自身の使った力の説明を始めた。
「今俺が使った力は霊力と言うものだ。結界や占い。召喚術が強く、魔力とは違う五行の属性をを持っている」
「なら魔力は？」
ルーナが質問をする。
「基本的に魔力とは万能な力だ。大体のことは出来る。しかし魔力はその方面の力には劣る。万能ゆえに届かぬ」
「強みがない？」
「いや、色々なことに対応できるからな。守りに攻め、支援など色々とな」
「では、どういうことですか？」
クリスも気になっていたのか直ぐに質問をする。それに対して紫苑は直ぐに答えた。
「例えば同じ力の量で俺が霊力で作った結界とクリスが魔力で作った結界では耐久力が俺の方が高い」
最後の説明で納得したのか2人は頷いてくれた。
紫苑は一旦そこで区切ると全員を見渡し話を続けられるか確認し、大丈夫そうなため話をつづけた。
「本題に入るぞ。この世界にある基本的な力の属性は7つある。魔力、霊力、霊気、龍気、鬼力、仙気、そして神力だ。全てを説明すると長くなるからせぬ。このうち霊気と呼ばれる力がテレスに宿っている」
紫苑は話の基盤になることを説明し終えた。この大陸の人たちは魔力しか知らないため事前知識は必要なのである。
紫苑は火の弱くなった焚き火に薪をくべる
「霊気、それがテレス様に宿る力…」
「そのような力が私に…」
クリスとルーナは吸い込まれるように地面に顔を向けて考え込むようにブツブツと言っている。そこで好奇心をまだ持つルーナが質

問をしてきた。
「じゃあ、霊気ってどういう力なの？」
「霊気と言うのはな精霊が使う力だ」
「精霊って自然を豊かにして守るって言うあの？」
「そうだ」
　霊気とは自然の中に存在する精霊が用いる力である。基本的に人間の前に姿を表さず持って自然の中で生き、自然の力を宿す存在。そのような存在の力がテレスには宿っている。
「ちょっと待って下さい。そのような力が私にあるならどうして私には何も出来ないのですか？…しかもどうして貴方にそれがわかるんですか？」
（予想はしていたがやはり先程の自信が行使した事実を忘れているようだな）
　どうやらテレスは覚えていないようだった。暴走ゆえに自身の意思がなかったからなのかそれとも他に要因があるかは誰にもわかることではない。しかしただひとつわかることがあるとすれば先程のことでテレスの閉じていた蛇口が開いてしまったということだけである。
「お主にその力が宿っている理由は俺には分からんが、その力はおそらく自身かそれともお主の友であるルーナの危機に反射して出てきたのだろう。そしてわかる理由は数年前に見たことがあるからだ」
「貴方は精霊に会ったことがあるんですか？それに私がルーナの為に？」
「ああ、そうだ」
　テレスは何かを噛み締めるように自分の手を見ていた。
「私がその力を使えるようになれば２人を守れるようになりますか？」
　テレスは紫苑の顔を真っ直ぐ見ていた。自身の生活を奪った者への復讐ではなく守るための質問は優しさを感じ取ることが出来た。
「なれると保証は出来るが俺自身その力の使い方は知らんでな。自分で見つけるしかないぞ？」

紫苑は霊気を宿している訳では無い。しかし彼女が望むなら紫苑はできる限り手伝おうと思っている。
「テレス様、私が貴方を守ります。だから貴方が自ら傷つきに行く必要はないんですよ？」
クリスがテレスを気遣うように言った。その表情は心配を浮かべている。多分それは己の主を必要以上に傷つかせないために。
「ありがとうクリス。でも私は強くなりたい。誰かに守られて傷を負わず逃げるのでは無く、誰かを護って傷つきたい！」
テレスは力強くそう言った。それを見たルーナも何かを考え込むような素振りを見せた。
「ねぇ、クリス私も強くやりたい。だから私に戦うことを教えて？」
「私からもお願いします」
２人の願いを聞いて少し考え込むクリスはどうすれば良いのかを考えているようだ。
確かに従者としては余り主を前に立たして戦わせたくはないだろう。仕方の無いことだ。
自分達の無力を知った２人は止まることはない。紫苑はその決意を感じ取り焚き付けた本人としてクリスに進言した。
「やる気あるなら十分だ。教えてやりな。それがお主の主の願いだ」
「……分かりました。やるからには厳しく行きますよ？ルーナ様」
「うん。ありがとうね。ワガママ聞いてもらって」
「いえ、私の方こそ貴方たちの覚悟を軽視してしまって。しかしテレス様の力、霊気？ですよね。それはどうやって教えるのですか？私は魔力しか分からないですよ？」
誰も霊気を扱えないと言う状況ではクリスの心配は必要な心配である。しかし紫苑は慌てることも無く落ち着いていた。
「ある程度は出来るが全ては出来ん。だがテレスはもうその力を解放した状態だ。今までの体の中に押し込めていたのとは訳が違うからな。そなたはもう体の中にある違和感を感じれるはずだ」
「違和感……何かこう、体の中でモヤモヤがあるような感じですか？」
「おそらくそれだ。少し無責任かもしれんが使い方はそなたが見つけ

ろ。その力が存分に使えるように場は整えてやるからな」
「はい！ありがとうございます！」
元気よく挨拶するテレスはわくわくしているようだった。
テレスは魔力と言う力を扱える人たちの中で育ちながら自分だけ使えないということで差別を受けていた。それでもここまで明るいことに紫苑は驚く。
帝国もテレスの力が狙いだろう。その強大な力があれば簡単にこの大陸を支配できる程なのだから。そのためにテレスには力をつけてもらわないといけない。
クリスとルーナの方も話をしているようだ。
「とりあえず大方の説明は終わった。これから旅の途中でその力の練習は行おう」
「今からでは無いんですか？」
「ああ、やる気があるのにすまんな。明日は街によって旅の準備をしないといかんからな。とりあえず休め」
「分かりました。じゃあルーナ達を呼んできますか？」
「そうしてくれると助かる」
紫苑の返答を聞いてクリス達の方に向かったテレスは先程よりも明るく見えた。不安もあるのだろう。しかしそれだけでは無い。自身が守ることの出来る強さを身につけることが出来ることに対する嬉しさがあるのだろう。
それから3人が戻って来てから少しして紫苑たちは眠りに着いた。

第9話

早朝、朝の4時頃野営をした4人と1匹のうち最初に目覚めたのは紫苑だった。他の人達はまだ寝ているようであった。

起きた紫苑の表情は少し悪く何か悪い夢を見たようだった。

(最悪な気分だ)

紫苑の気分は夢により最悪だった。しかし紫苑はその夢を拒むことはしない。なぜならそれは戒めでもあるからだ。

(そろそろ朝飯の準備をしなければ)

そう思った紫苑は立ち上がり朝食になる者を探しに行こうとした。それを手伝って貰おうと彼の隣で寝ていた八重香の方を見ると狐の姿で気持ちよさように寝ていた。

無理に起こすのも酷と思った紫苑は彼女を寝かして自分一人で探しに向う事にした。

少しして十分な量の山菜と川魚を取り終えた紫苑は野営地に帰って来た。

帰るとクリスが起きたようで紫苑を見るで少し眠そうな顔をして近づいてきた。

「早起きですね。すみません、貴方に全てを任してしまって、今からでも手伝っても大丈夫ですか?」

全てを1人でやろうとしていた紫苑は彼女の申し出に少し考えた。しかし1人でこのまましても時間がかかると思いクリスの申し出を了承した。

「では、薪を探して来て火を着けといてくれ」

クリスにそう言うとすぐに薪を探しに行ってくれた。

紫苑はその間に魚の処理をして串に刺していた。次にするのは山菜の汁物しかし昨日と同じではあれなので味噌を使う事にした。

処理を終えるといつの間にかクリスが薪を集め火をつけていた。それを見て紫苑はクリスに礼を言うと鍋を置いて汁物の準備を始めた。

「そういえばその鍋何処から出したんですか？最初に会った時は持っていなかったですよね？」
疑問に思うのは必然だった。元々持っていなかった鍋がいきなり現れたのだ。疑問に思わないのがおかしかった。
３人とも疲れていて気づかなかったんだろう。それでも落ち着いた今になって気になったようだ。
「鍋か？これはこれから出したんだ」
そうして紫苑が見せたの掌に乗るぐらいの小袋だった。それは古く少し小汚い様子だった。
「そんなものから？いや、まさか異空間袋ですか?!」
「ああ、御先祖様から受け継いで来たものだ」
「貴方の先祖は何者ですか？」
クリスは軽く言う紫苑に少し呆れながら質問をした。
それもそのはず、この世にある異空間袋とは全部で７個だけであった。しかも殆どがどこかの国か光聖院教会と呼ばれる宗教団体によって保管されている。
そんなものと同じものを持っているのを見て驚かない方がおかしかった。
「……鬼だ」
「え、冗談ですよね？」
彼女は紫苑の答えに少し狼狽えてしまった。
鬼とは恐怖の象徴であった。その中でも鬼神と呼ばれる神が昔からよく物語の悪役として出てきているためこの大陸ではマイナスなイメージが定着している。また先程も名前が出てきたが光聖院教会と言うこの大陸での基本的な宗教であるところでも鬼とは邪悪の化身と定義していたのも理由であった。
「冗談だ」
紫苑は少し笑って言った。それは相手の不安を取り除くための行為だった。
クリスもその笑顔に冗談だと思い安心した。先程は少し真面目な雰囲気があったので本気にした彼女だがどうやら悪ふざけだったよ

うだ。
「紫苑殿、私だから良いですけど他の人にそんな事言ってはなりませんよ？光聖院教会の中でも強い信仰がある信者とかだったら冗談にならないですからね」
「……分かった」
クリスは少し忠告をした。それは完全に自身と主の恩人である紫苑への心配をしていたからだ。
少し間を置いて紫苑は了承した。少し不満げであったのは気のせいだろうとクリスは思った。
少しして完全に飯の準備が出来る頃にはテレスとルーナの２人が起きてきた。
「すいません２人とも、２人が準備をしている間も寝ていてしまって」
テレスは少し申し訳なさそうに言った。ルーナどうやら同じ気持ちなのか申し訳なさそうに紫苑たちを見ていた。
「気にするな、俺が早く起きただけだ。それより飯にしよう。せっかく作った飯をそんな風に食われたらこっちとしては意味が無いだろ。申し訳なく思うぐらいなら美味しく食え」
「はい！」
２人の返事を笑顔で返したあと昨日と同じように紫苑は焼き魚と汁物の入った椀を手渡した。３人の美味しく食べている姿を紫苑は満足気に見ていた。
そして自分も飯を食おうとすると八重香が起きてきた。
「眠たそうだなお主。普通主より早く起きるのではないか？」
少し責め立てるように言う紫苑だが怒りの感情は無かった。それをわかってなのか八重香は少しも動じた様子は無く紫苑の膝の上へと座った。
「仕方のないやつだな」
そう言った紫苑は八重香の分の魚を食べさした。それを八重香は嬉しそうに食べていた。何も知らないもの達が見れば狐と男がイチャついている残念な光景に見えているだろう。
それはクリスとルーナも同じで紫苑たちを見ていた。テレスはそ

れを苦笑いして見ていた。
この大陸では使い魔は普通で紫苑の膝に座っている狐もそのような類のものだろうと2人は考えていたので何も言うことは無かった。
食事が進み全員が食べ終わると今度は全員で後片付けをした。クリスは最初自分が2人の分をやると言っていたが結局は2人に折れてしまった。そして2人はぎこちないながらも皿を洗ったりなどと頑張った。
少し遅くなってしまったことに対して申し訳なさそうにする2人だったが、
「大丈夫だ。初めてだったんだろ？次からはしっかり出来るよ」
そう言った紫苑に2人は感謝した。
「では、そろそろ街に向かおうか」
紫苑の言葉に全員が同意し出発することになった。ちなみに八重香は紫苑の肩に乗っている。
紫苑が前で1番後ろはクリスが警戒する。そして間に2人が挟まれるようにして真ん中に配置されている。
昨日の所は危険なので避けて別の方へ進むことにした。
木々や草の中を進むのは数日歩いた程度の2人では少しきついようだ。しかし弱音を吐かず頑張っていた。
大森林は多くの木々のおかげで薄暗かった。それがまた不安を煽るのだが紫苑は気にしてないように進んで行った。それのおかげかテレスとルーナは不安を和らげ進むことが出来ていた。
森を数十分程歩いていると紫苑が止まった。何事かと3人が紫苑の前を見ると前から緑色の小人のようなものが3体歩いてきた。
ゴブリンだ。魔物の強さは基本E～Aのランクがありその中でもゴブリンは1番下のEランクで弱いとされている。しかしゴブリンは上位個体や群れる習性もあり油断すると簡単に殺される。
3人はすぐに警戒する。
「小鬼か。皆しゃがめ！」
ゴブリンはまだ紫苑達に気づいていなかった。それを察知した紫苑は無駄な戦闘を避けるために後ろに小さな声で言った。それを聞

いた後ろに居る3人はすぐにしゃがみ込んだ。幸い長い草は簡単に人が隠れることが出来たため気づかれることは無かった。
「グギャ！グギャギャギャ！」
「グギャ、アイヅラヅガマエロ。ナガマヨンデゴイ！」
隠れている紫苑たちは信じられないものを聞いて驚いていた。ゴブリンとは知能が低いのだ。それは上位個体でも同じで言葉を喋る個体など聞いたこともない。しかしあのゴブリンはたった今喋ったのだ。
3人が唖然としている中紫苑は別のことを考えていた。
（あいつら捕まえろ、仲間呼んでこい。…この先に何かおるのか？）
紫苑は先程のゴブリンの言ったことを考えていた。
しかしその間にゴブリン達は消えていた。
「小鬼達は去ったようだ。とりあえず少し迂回して行こうか」
紫苑はこの先に進むのは危険と考え迂回することを提案した。それに全員が同意すると紫苑は先程とは違う方向に進んで行った。

大森林のとある場所
薄暗い森の中ある息を切らしながら走る3人組がいた。1人は剣を持った男の剣士、1人は弓を持った女の狙撃手、1人は杖を持った女の魔法使い。
世にいう狩人と呼ばれるもの達である。
彼らは大森林の街道でゴブリンの目撃情報が増えたことに対する調査でここを訪れていた。
痕跡などを探して少し奥に来た時だ、いきなり周りからゴブリン達が待ち伏せをしていたか現れたのだ。しかも退路を立たれた状態だった。その時は狩人達は驚きはしたものの恐怖を浮かべることは無かった。

新人ならまだしもベテランである自分たちならゴブリン程度にやられることは無いそう思っていた。
しかし彼らの予想は外れた。
剣士の剣は彼らを切れず、狙撃手の弓は彼らを射抜けず、魔法使いの魔法は彼らに当たらず、逆に彼らの方がダメージを与えられる状態だった。
無傷の敵と満身創痍になった彼ら。
狩る側だったはずの狩人はいつの間にか狩られる側になっていた。
満身創痍の彼らは退路を絶たれ逃げたくても出来なかった。
着々と追い詰められていく中で魔法使いが全ての魔力を使い後方に爆発魔法を放ったのだ。それにより後方に退路が出来て逃げることが可能になった。
魔力を殆ど失った魔法使いは気絶したために剣士が背負った。
そして剣士と狙撃手は急いで魔法使いが作った退路を急いで進んだ。
後ろからは複数の足音が聞こえた。おそらくゴブリンたちが剣士たちを追いかけているのだろう。
気になるが振り向くことは無かった。振り向けばそこに絶望がある気がしたからだ。
草を掻き分けひたすらに前に進む、限界でも走り続ける。何故なら止まった時が最後になるだろうから。
そして遂に彼らは元いた街道まで戻って来た。後少し頑張れば街に戻れる。そう彼らは安心してしまった。それが少しの気の緩みになったのかは定かではないが魔法使いを背負った剣士が転けてしまった。それが仇となりゴブリン達にまた包囲されてしまった。
「くっ！ここまでなのか、せっかくミルが退路を作ってくれったってのに！」
「あんたそんなこと言ってる場合じゃないよ！このままじゃ本当にやられちゃうよ」
諦めかけている剣士に喝を入れながら狙撃手は牽制のために弓を構えていた。しかしそれが無意味と言わんばかりにゴブリンたちは

笑っていた。
「でも、さっきも俺らの攻撃がなんにも聞かなかったじゃねぇか！」
弱音を吐きながら怒りをぶつけてしまう剣士。しかしそれでも諦めない瞳を持つ狙撃手。
「あんたそんなやつだっけ？いつものあんたは自信に満ち溢れて私たちを先導して進んでいた。そんな弱音の吐く男なんかじゃなかったはずよ」
それを聞いた剣士はハッとした表情を浮かべた。
「……そうだよな。こんな簡単に諦めんなんてどうかしてたよ」
そう言った剣士は魔法使いを地面に寝かして剣を抜いた。
「グギャ、マダデイ　ゴウ　ズルゲンギ　アルガ」
その時、一体のゴブリンが喋ったのだ。
「な、なんでゴブリンが人間の言葉を喋ってるんだよ！」
「グギャ、オマエ　ラガ　キニス　ルコト　ナイ」
そのゴブリンは片言ながらもしっかりと喋っていた。群れのボスなのだろうか。体は普通のゴブリンよりも一回り大きく、ゴブリン達はあの喋る個体の言うことを聞いていた。
「くっ！まぁいいやることは変わらない！」
その言葉に2人は覚悟を決めた。ゴブリンだと侮っていたが今は違う。完全なる格上なる存在。
自分達は狩られる側、それを認識した上で挑むのだ。
そして剣士たちは動き出す。まず近くにいたゴブリンに剣を振り下ろした。しかし傷をつけることは出来ても切り裂くことは出来なかった。しかしそれは承知の上でのこと。ただ蹂躙されるのではなく抵抗して死んでやる。それが今戦っているもの達の思いだった。
切り裂けなかった剣は止まり今度はゴブリンの棍棒が振り落とされる。しかしその時狙撃手が弓でゴブリンの目を射抜いたのだ。先程はゴブリンの異常な強さに驚いてい出来なかったが覚悟を決めてからは落ち着くことが出来たようだ。
「グギャア゛ア゛ア゛ア゛ア゛」
痛みによるゴブリンの悲鳴が辺りに聞こえた

そして初めて出来た攻撃に指揮が上がり始めた。
「やったぞ！初めてダメージを与えられた！」
「気を抜かないでよ！」
自分の攻撃ではなかったが仲間の攻撃が通用したことが希望になり嬉しくなったのだ。自分たちにはまだ希望があると信じられたのだ。しかし現実はそう甘くなかった。
「チョウシ　ノルナ　ニンゲン　オマエら　ドゲ」
先程喋ったゴブリンが周りに命令をした。するとすぐさま全てのゴブリンが道を開けて後ろに下がったのだ。
「ボスのお出ましか」
「あいつを倒したらもしかしたら何とかなるかもしれない」
魔物の世界は弱肉強食の世界。そんな中で群れであるゴブリンのボスを倒せば他の奴らが恐れをなして逃げていく。
そういう希望があった。だからこそ２人は何としても勝たないと行けなかった。
「俺達は生きるために突き進む！」
「オマエら　デイド　アイデ二　ナラナイ」
「絶対に勝ってやる！オリャア！」
剣士はゴブリンとの距離を詰め剣を振り下ろした。振り下ろした剣はゴブリンの首に当たった。
（やったぞ。急所だ！）
しかし先程とは違い傷すらつけることは出来なかった。それに唖然としているとゴブリンが蹴りを剣士の腰に入れてきた。
「危ない！避けて！」
「えっ？」
狙撃手が剣士に警告するが遅かった。気づいた時には剣士は吹き飛ばされ木にぶつかっていた。
「ジョシュ！」
狙撃手は剣士の名前を呼んですぐに向かっていった。
「すまない、リア俺が油断をしてしまって」
「そんな事ない。私がすぐに弓を射っていたら」

２人はお互いに謝罪をしていた。そしてボスゴブリンが少しずつ２人に近づいて来た。
「オマエら　ヨワイ　イカズ　ガチ　ナイ　」
そう言ったボスゴブリンは仲間の棍棒を奪い振りかぶった。
「ごめんな。俺が転けなかったこんな事には、それにミルもあのままじゃ…」
「ううん。仕方ないよ。ミルにはあの世で謝ろ?」
「…そうだな」
もう何もできることは無かった。全力で抵抗した。しかし勝つことは出来なかった。だからこその諦めだった。
２人は死ぬ事が怖くない訳ではなかった。しかし全力を出しても勝つことが出来ない相手にこれ以上の抵抗を求めることが出来なかったのだ。
２人は同時にゴブリンの方へ向いた。
ゴブリンは棍棒を振り下ろした。
そこでジョシュと呼ばれた剣士は最後の抵抗にリアと呼ばれた狙撃手を庇った。リアはそれにありがとうと心の中で感謝した。
痛みが来ると思っていたが一向に来ることは無かった。もう死んでしまったのかそれとも奇跡が起きたのか。
いやそんなハズない現実は物語ではないとジョシュは考えていた。
しかし一向に来ない痛みに痺れを切らしジョシュは目を開けた。
目を開けるとリアが驚いた表情をしていた。
なんだろうと思い、リアの向いている視線の方、ボスゴブリンの方を向いた。
そこに居たのはゴブリンの棍棒をそれよりも細い黒剣で異国の服を着た男が防いでいる光景だった。
「結局遠回りしてもこうなるのか。俺も大概だがあの娘達も結構な運だな」
そう言って男はゴブリンの棍棒を払いこちらも一瞬向いた。
「お主ら何があったのかは知らんがそこにいろよ?守れなくなる。ほれお主らの仲間だろ?」

男はジョシュ達に魔法使い、ミルを投げた。
「オマエ　ナニモノ　ツヨイ」
ゴブリンは自分に自信があったのか男に自身の攻撃が弾かれたことを困惑しているようだった。
「俺か？別にそのようなこと気にする事はない。今から殺るのは殺し合いよ。別にお主に恨みはないがこの者らを守るためにその命頂戴するぞ？」
そう言って男、天鬼紫苑は刀を構えた。

第１０話

紫苑は刀を構えながら目の前のゴブリンに違和感を覚えていた。その違和感が何なのかは本人にすら分からなかった。

しかし今はそんなこと関係ないとその思考を隅へと追いやった。

先に動いたのはボスゴブリンだった。手に持つ棍棒を自身の力とその速さに合わせて横に振った。それは凄まじい威力を持っており人間が喰らえば即死だろうと思えるものだった。

しかし紫苑はそれを避ける動作を見せなかった。

「危ない！」

それは当然の警告だっだろう。傍から見れば何も気づけず自身に向かう死を認識出来ない憐れな人間に見えただろう。実際ボスゴブリンですら先程感じていた強さは錯覚だったのかと思っていた。

「鬼樹流・鬼流し」

棍棒が紫苑に当たる瞬間に紫苑は刀でそれを流すようにして受け流したのだ。流された棍棒は地面に当たりめり込んでいた。そして紫苑はその一瞬でボスゴブリンの腹を斬っていた。

ジョシュは何が起きているのか理解することが出来なかった。あの強力な一撃がどうしたらあんな細い剣で受けられるだろうか。そんなことを考えていた。

しかし紫苑が与えた一撃はそこに存在していなかった。

（どういうことだ？確かに斬った筈だが？その証拠に血が出ておる。……となれば驚異的な再生能力か）

紫苑は切ったはずの腹に傷が存在していなかったのとそこから出る血で一瞬にして答えを出した。

「オマエ　ヅヨイ　ゲドオ　レニガデナイ」

「やりようはいくらでもある」

ボスゴブリンに言い返した紫苑は決して強がっている訳ではなかった。

今度もまたゴブリンが攻撃をして来た。今度もまた同じ動作で同じ攻撃だと考えられただろう。しかしそれはフェイントで一瞬で動

作を切り替えジョシュに放ったのと同じ蹴りを繰り出した。
しかしそれもギリギリで躱す紫苑。そのようなことが繰り返させる中紫苑はボスゴブリンが大きな隙を見せた瞬間構えを取って集中しだした。
「纏技・炎鬼」
その瞬間紫苑には膨大な力が集まり刀に収束して行った。すると刀には赤黒い炎が纏われていた。その炎の温度は少し離れているジョシュ達にも伝わってきた。ボスゴブリンも戻った体制でもう一度紫苑を攻撃しようとするがそれに危機感を感じ後ろに下がったのだ。
「流石に感じるか。まぁいい今度はこちらから行くぞ！」
紫苑がボスゴブリンに向かおうとした時だ。他の小さなゴブリンが紫苑に襲いかかってきた。
「チッ。鬼樹流・鬼斬一閃！」
紫苑はそれを的確に避けて技を放ちゴブリン達を攻撃した。ゴブリン達の胴体が真っ二つになっていた。しかし血が出る暇もなくや全身に炎が回った。
そしてゴブリン達は一瞬にして消し炭になる。刀に纏われた炎の力だ。
「グギャ　グギャ！」
何体ものゴブリンがまた紫苑へと襲い掛かるなかでボスゴブリンは後ろの方で様子を伺っていた。
「鬼樹流・鬼舞乱舞」
紫苑は一体、また一体と時には複数体を1回に斬って行く。ゴブリンの血は炎のおかげで紫苑にかかることは無かったがその姿はまさに鬼神のような姿だった。
(次元が違う)
その戦う姿を見てジョシュはそう思った。ジョシュの目には一瞬でゴブリンが真っ二つになって灰になるそんなことしかわからなかった。
１００程居たと思われるゴブリンはいつの間にかボスゴブリンと

１０体しか存在しなくなっていた。
「お主もう殆ど仲間が居なくなったぞ？」
紫苑の問にボスゴブリンは何も答えなかった。その時また紫苑は違和感を覚えた。
（なんなのだこの違和感は？１人から２分の視線を感じておるがどういうことだ？」
紫苑はボスゴブリンから本人以外の視線を感じていた。それが最初よりも何か絡みつくように紫苑の感覚を襲っていた。それにより一瞬の隙を見せた紫苑にボスゴブリンはチャンスと思い突撃した。
「グギャアア！」
（考えている時間はないか）
紫苑はその不快感を振り払い集中をした。
ゴブリンが棍棒を振りかぶると紫苑目掛けて振り下ろした。紫苑はそれをギリギリで避けて上段の構をとった。それに危機を感じだボスゴブリンは棍棒で防御をする。
「鬼樹流・鬼落とし」
その瞬間紫苑は刀を振り下ろした。振り下ろした刀は棍棒に当たるが何故か物凄く硬く切ることは出来なかった。紫苑はこの時棍棒から微弱ながらに隠蔽されていた力を感じていた。
（この棍棒硬すぎるぞ。何かの術で強化されておるな？まぁいいそんな力で防御したとこで意味は無い）
ボスゴブリンには自信があった。この棍棒ならこの男に着られることもあの忌々しい赤黒い炎が自身を傷つけることがないと思っていた。実際紫苑の刀は防がれていた。しかし紫苑の放つ技の本領はまだ発揮されていなかった。
（フセゲダ　ゴノオドゴ　ツヨイ　ゲド　オレニ　ガデっ！）
ゴブリンは考えながら紫苑を振り払おうと力を入れようとしたが力が入らず思わず思考を中断した。
否、力が入らないのではなく既に彼はもう全力を出していたのだ。彼に感覚はなかった、しかし彼の本能が気付かぬうちに全力を出さしていたのだ。この技は鬼が金棒を振り下ろすような威力になるのが

特徴だった。例えボスゴブリンが力自慢でも鬼の力には劣るだろう。
ボスゴブリンの筋肉はミシミシと嫌な音を立てて彼に痛みを教えていた。
「ナンデ　オレガ　チカラ　オトル？」
ボスゴブリンはただ困惑していた。自分よりも強いやつなどいないと思っていたしワイバーンですら自身は倒したのだと現実逃避をしていた。
「お主のその体と棍棒を誰に与えられたか知らんがお主自信がそれを使えこなせなければ意味などないぞ」
「ヂガウ　ゴレバ　オレノヂガラ」
ボスゴブリンは困惑していた。与えられた力は無敵だと思っていた。しかしその力以上に強い存在が自身を殺そうとしている。それ自体がボスゴブリンには信じられないことだったのだ。
「最初の自信は何処へ行きおった？」
紫苑は問いかける。しかし混乱しているボスゴブリンには答えられなかった。
刀では傷を付けられなかった棍棒も刀に纏われた炎に少しずつ溶かされていた。
次第にボスゴブリンの力は弱まっていた。それにより段々とボスゴブリンに棍棒は近づいていた。
そしてついにボスゴブリンは限界が来たのか完全に力を抜いてしまった。
棍棒は折れ刀はそのままボスゴブリンを脳天から斬った。即死だった。斬られたゴブリンはそのまま獄炎が燃え移り少しずつ焼かれて行った。
「終わったのか？」
「ああ、終わったな」
不安そうに聞くジョシュに紫苑はそう言った。しかし紫苑にはある懸念があった。
（あの小鬼は明らかに強化されておるものだった。しかもあの棍棒も強力な術が仕込まれておった。それにだあれから感じだ視線、あれは

あの小鬼からしておった。おそらく何者かが見ておったな）
多くの不安要素はあるものの紫苑にはやることがあった。だからこそ今のことに警戒しつつもそちらを優先することを紫苑は選んだ。
「さて、そろそろお主らも出て来い」
紫苑がそう言うと何も無い所から突然赤髪と茶髪の３人の人間が現れた。髪の色と顔つきも少し違うがテレスとルーナそしてクリスだ
先頭には白い狐がたっていた。
「えっ？何処から現れたのよ！」
突然現れた３人に驚いたリアは思わず叫んでいた。
「そりゃ驚くな。こいつらは幻術で隠れておったのだ」
それを聞いて驚くジョシュとリア。何故なら幻術とは魔法で最も難しい術のひとつとされていたからだ。しかし白い狐元いい八重香が使う力は魔力とはまた違う力で特性も違う。だからこそ得意とするものは魔法の常識に当てはまらない。
「助けて貰って不躾な質問だけど、隠れてたならなんで私達を助けてくれなかったの？」
当然の疑問だ。隠れていたなら彼らを見つからずに助けることは出来たはずだからだ。
しかしそれにもしっかりとした理由がある。まず３人は誰にも身元がバレないように姿を偽る必要があった。しかしまだそれが出来てもいない状態で助けるためとはいえ名前も知らない相手に姿を見せるのは危険だと考えたからだ。
そしてようやく今紫苑が渡した札が彼女たちに馴染んだところで呼んだというわけだ。
「すまんな、あの者らは俺の護衛対象なんだ。だから危険に合わせることは出来なかった。すまない」
「けど助けるぐらい…」
「もういいじゃねぇか。俺達は生きている。それだけで今は嬉しいさ」
その言葉を聞きリアは黙った。確かに助けて貰って生きているの

に文句を言っても仕方がないと同意した。
「所でお主らここら辺に街はあるか？」
「街なら今から俺らが帰るところだし案内するぜ！」
「そうか。ありがたい」
　気の良いジョシュの言葉に礼を言う紫苑に続いて３人も礼を言う。
「いいよ礼なんて。こっちは命助けられてるんだからな。これぐらいさせてくれ」
　そう言い立ったジョシュだがふらついていた。ボスゴブリンの一撃がまだ効いているのだろう。
「ジョシュ！あんたまだ回復してないんでしょう?!休まないと！」
「けどこの人達案内しないと」
　そう言うジョシュだがふらついて今にも転けそうでそのまま街まで行くなら日が暮れそうだと皆が思った。
「私が案内するから安静にしてなさい！」
　そう言ってジョシュを無理やり座らせたリアはこちらを向いた。
「助けて貰ってあれですけどジョシュのこと運んで貰えます？流石に私じゃ持てないから」
「大丈夫だ。そちらの魔法使いはどうする？」
「あっ忘れてた」
（それは酷いだろ）
　リアの答えに紫苑はそう思った。
「クリス頼めるか？」
　紫苑は手が空いているクリスにそう言った。
「大丈夫だ」
「なら頼むよ」
　そう言って紫苑はジョシュをクリスはミルを背負った。
「では案内を頼めるか？」
　そう言った紫苑にリアは頷き歩き始めた。
　それを４人は後ろから追って行った。